

# 伊賀越道中雙六

## 第 壹 鶴が岡の段

大權聖者一聖徳太子、此未來記の事太平記に詳なり

行家、志津馬一渡邊惣負と敷馬羽二重侍一物柔かなる武士

竊に緝著せず一懼らず心のありたけいふ

大權聖者の未來記に、書記したる四海の治亂、元弘の戦一統に、切鎖めたる足利氏、草も揺がぬ鎌倉山、頃は太永元年二月上旬、鶴が岡の奉幣に、勅使下著の知らせによつて、山内の執權上杉顯定、警衛の役目承、坂本に假屋をしつらい、一日がはりの家中の守護、和田行家が一子志津馬、威儀嚴重に守り居る。折節佐々木丹右衛門、非番の姿上取つて、下を憐む羽二重侍、假屋に來かより、志津馬殿、當日の役目御苦勞」と挨拶し、「別して今日は勅使御入の日なれば、取別て大切の御番、随分鹿末のない様に。と申も此丹右衛門、貴殿の親父行家殿に劔術の門弟、是迄外の弟子よりも、格別に御差圖下されし師匠の御恩、山よりも高ければ、其御子息の志津馬殿、次第に立身も有様と、神に心願を込奉り、祈る程の拙者が心底、日比から齒に緝著せず申を、必氣にはさへられ

澤井股五郎一河  
合又五郎

な。貴殿の疵は御酒參ると、萬事を忘れさつしやる色と酒をば敵とせよとは、賢者の  
禁しめ、常に此義をお忘れ有な」と、眞實あまる異見なり。焉ハア忝いおしめし。兼  
兼親共が申にも、劔術の高弟といひ、若けれ共實義有丹右衛門殿、兄弟同然に、萬端を  
相談致せ、と申付置れたれば、其元様を兄と思ふて居まする」丹イヤそふ請て下されば、  
拙者は何より甚祝著。弟子傍輩の事を申は如何なれども、氣の赦されぬ男は、澤井股  
五郎。彼が従弟城五郎は、鎌倉殿の昵近衆、直人を一家に持たと鼻にかけ、御前の勤も  
疎にして、晝夜遊所に入込由、必彼を友になされな。昨日は拙者が番、今日は非番な  
れ共、内證ながらも見廻りも致さふと存じて推參致した。勅使のお入に間も有まじ、別  
當へ參つて配膳の、勝手の手案内見て參らふ。後刻くと別れ行。折柄うそく來かと  
る町人、番人聲かけ、「ヤイく何處へ行。御假屋の前、すざりおらふ」と口々に、嚙付  
られて犬突這ひ、町今ア、イヤ、私は切通しの町人、本庄屋定七と申て、和田のお家へ  
お出入の者、志津馬様に用事有て」と、聞より志津馬、「苦しくない、是へ參れ」と傍近  
く、焉今日は勅使御入の社内故、一人人を改る。急用か、何事ぞ」馬ハイ、イヤ別義  
でもござりませぬ、彼金子の義を」焉コリヤく。イヤサ家來共、其方共は南門へ參つ

如何様一成程

つか〜一刀の  
つかにかく

掛屋一金銀のか  
はせを取扱ふ者

政道一取締

段かへき一段染  
の被衣敷  
しどもなく一だ  
らしなく

て人を通すな。残らず往け」と追やれば、庄「ハア如何様、金銀の事は内證、爰で申は不  
 調法」赤「アイヤ〜契約の日が延引すれば、無理とは思はぬ。が此事は股五郎殿を頼で  
 置た。一兩日猶豫を頼」と、咄し半へ大小も、金拵へのつか〜と、入来る澤井股五  
 郎、人を非に見るのさばり顔、股「ヤア定七、お手前が來た筋は、股五郎が呑込でおる。部  
 屋住の志津馬殿、吉原通ひの内證金、今用立て置たれば、兼てお身が願ふておる、お國  
 の掛屋に仕てやるさ。時に志津馬、頼が有。身が懇意にする町人の女房、今日勅使のお  
 入を聞て、都人の装束姿拜見させて下さわ」と、據なく願ふに付、裏門からこつそり  
 と、最前社内へ入て置た。爰は粹な貴殿なれば、大目に見てくれまいか、どうぢや〜」  
 志「ア、イヤ〜、町人たる者殊に女、左様の事を政道する志津馬が役目。外の者の見ぬ  
 中に、一時も早く追歸されよ」股「ハテそふ堅ふいうた物じやないわい。コレ貴様の好の  
 女だわい。マアちよとよい女房見たがよい。器量はどてん天人姿、天降してお目にか  
 けふ。爰じや〜」と手招きに、下来る坂の段かづき、屋敷か町と三重の帯、堅ふ見せ  
 てもしどけなく、女志津馬様わしじやはいな」と、被を取ば松葉屋の、「ヤア瀬川じやな  
 いか」と志津馬が恠り、股「ナント股五郎は粹ではないか。何が一日逢ねば百日と、吸付

しげれ—睦とく  
咄せ

合ふておる中。身共とは違ふて親持の身分、此間より御前勤に間がなふて、廓へ來ぬを女氣で、若や心替りかと案じるが可愛さに、手工合して今日の參會、よもや腹も立まいが。コレ太夫嬉しいかく。遠慮なしに、しけれくと、突やられてぴんとすね、「女中法度の此お假屋、追いなせとおつしやつたは、よくくわたしがお嫌ひそふな」と、思はせぶりの雪の梅、解けぬしかけがそれしやなり。志「イヤサそふではなけれど、是は又きつい所へ連れて來た。御門は誰が通したぞ」實「イヤ此實内奴でござります」志「スリヤ御門を通したはおのれか、エ、憎い奴」とはいふ物の、おれも顔が見たかつた」股「エ、とふから左様碎ければよい。堅い顔が氣にくはぬ。家來共は散つて仕廻た。實内は志津馬の腰付、廓の供する粹奴。かふ寄た所は、とんと廓の座敷に成た。太夫主のお持せ是へ」「ナイ」と返事は奴の遣手、蒔繪の提重角樽は、股様よりの御見舞、「吉彌煙草」「アイ」と跡引長烟管、包ほどいて取出す。襦袢立木の櫻、あたりまばゆく見へにける。「先一獻」と股五郎大盃引受て、「サア志津馬慮外申」志「イヤ今日は太禁酒じや」股「といふてあの君が顔見て、飲ずには居られまい。ちよつと一つは身の養生、呑ば甘露の菊の酒、其盃定七に差召され。大事な一つ呑やれ。扱盃を差置て、お手前に頼事、別儀ではない。

引當―抵當

きよじ―間違

白紙―知らずにかく

此瀬川と此通りに深ふ云替した中。所にさる大家から身請の相談。向ふは千兩二千兩惜まぬ家柄。欲に喰付親方が其方へやらふといふを、先約なれば志津馬が方へ、五百兩で身請すると、此股五郎が突張て置たれど、今日翌日に迫つた日切。これ迄取かへも有上なれば、用立てくれまいか」是、ハイそりやはやあなた方のお頼、いかにもとサ申たけれど、部屋住の志津馬様、慥な引當がなければ」股、チ、サ夫も思案任て置た。和田の家いへの重寶ちゆうほう、正宗の名作を質物に差入る。是程慥な抵當はない」志、イヤ、コレ股五郎殿。其刀は先祖より傳はつて、常の差料には致さぬ重寶。質物に入る事は「股」ハテ扱悪い合點。其大切な刀じやによつて書入て、間に合すのさ。金さへ濟せばきよじはない。殊に此度武將の若君、御元腹の御祝義、諸大名より名作の劔獻上有べき折から、正宗多き中にも、和田の正宗は勝れて無双の名作、殿より御所望有は必定。其時に無ければならぬ大事の刀。暫の用に立、其中には股五郎が工面して取返す。氣遣ひせずとサア志津馬、其趣一札書てお渡しなされ」と、色に付入り正宗を、仕てやる心の劔とは、白紙取て認むる、若氣の思案ぞ是非もなき。定七證文懐中し、「そんなら金子調達致し、股様方へ持參致さふ。質物は結構なれど、所詮此方の物にはならぬ。御返濟の違はぬ様に」股、氣遣ひす

澤井—さはにか  
けて多きこと  
三月おどり一三  
ヶ月毎に一ヶ月  
多く利をとる  
めれん—大醉を  
いふ  
瀬川—せよにか  
く  
掛作—かけるに  
かく  
ぬけそ—逃げる

るな。身が一間は歴々。金銀澤井が呑込んだ」延「よござります。が申云ぬ事は聞へぬ。利銀は二割三月おどりでござります」と、欲の鵬股五郎に、詞番ふて立歸る。股「サアサア祝ふて是から祝言。天下晴ての志津馬が奥方。日出たいく、打て置。しやんく」調子に乗て最一つ大事か二つも三つもいつの間に、酔が廻つて役目の大事 忘れるめれんに「仕てやつた」と、笑壺に入たる股五郎、「仲人は酔の紛れ。積る咄しをゆるりと瀬川 暫く粹を通そふ」と、跡に難儀を掛作、廊下へぬけて行共しらず、青股主々々どれへござつた。ぬけそとは手が悪い。人をころりと殺して置いて、逃ふとは比怯者」瀬エ、コレナ、此様な嬉しい中に、殺すの死ぬのと氣にかゝる事計」青そんならおれと祝言するか、そなたは眞實嬉しいか。と有ば我等も千萬祝著、此悦びに又一つ」瀬ア、申其様に御酒上つたら、御用とやらの害になろ、もふ此盃は止にせふ」青止にせふとは祝言がいやか。いやでなくばま一獻。たとへ知行召上られ、ふちは瀬川に成とても、二人手に手を引合ふて、どんな川へも志津馬は本望。もう主も親も入ぬ。殺せく」と酔狂も、物がいはするくだ枕、膝にたわいもなき折から、勅使のお入と、呼はる聲、聞とひとしく丹右衛門、志津馬はいかに、とかけ付れば、南無三寶、例の沈酔、「コレ志津馬殿く」コレイナ太

淵は瀬川—淵が  
瀬にかはるとも  
の意  
志津馬—沈むに  
かく  
くだ枕—答をま  
くにかく

夢にも云々夢  
にも知らずと白  
川夜船にかく

夫様を待して置いて、あの様に寐てじやはいなア。こそぐりおこそ」と二人して、抱起し  
てもとろく目。母コレ志津馬、正氣を付やれ勅使のお入じや」馬イヤ猪口は嫌ひ、こ  
つぶで致さふ」母エ、何いふても死人同然。一世の浮沈何とせん。家來共此女裏門から  
追かへせ」と、替上下の肩衣を、身に引かけて志津馬が代り、勅使を出迎ふ深切も、夢  
にも白川高野、松吹風も音添て、後の難義と和田の家、世の成行こそ三重定めなや。

## 第二 行家屋敷の段

春毎に、詠めは飽ぬ鎌倉山、仁義を守る武士も、且に隠す桐が谷、和田行家が一構へ、書  
院先の遣水も、打手に靡く、娘仲間、塵取役や掃除番、其役々を割付て、一つ所へ寄たか  
り、「何と玉木、どふ思やる。今鎌倉のお屋敷では、どの若旦那がよい男」馬ア、コレお  
きやく。迎も男を吟味しても、生物は入れぬ。乾物で仕廻ておきや。生物をたべ過  
すと、お谷様がよい手本、親の赦さぬ徒と、親殿様の御勘當、毎日々々、お詫言に御  
出なさるよは、おいとしい事ではないか。追付お越なされたら、そなたの部屋に置まし  
て置ても。思はぬ咄しで隙入つた。必晩の宿下りに、假寐の床のふつてりと、握りご

明暮一開けにか  
柴垣一行家の後  
妻

政右衛門一荒木  
又右衛門  
殿一上杉顯定

願ひをさげ一辭  
職を願ふ  
隔有—柴垣の縁  
語

たへの有のをば、土産に頼む」と打笑ふ。一間の襖明暮に、血を分し子と血を分ぬ、義理の葛にからまれて、柴垣一間を立出て、「何をさばく、妣共、掃除仕廻ば勝手へ行、お谷殿を是へ呼や。必々目立ぬ様に」と有ければ、「ハイ」と、答へて、妣共、皆々勝手へ入にけり。今日も又何と云寄方もなく、詫にお谷が綱切で、しほくとして座に直る。柴心からとは云ながら、我内ながら人目を忍び、夫に付添女の道、政右衛門事は、我夫のお氣にも入、天晴の達人なれば、今日や殿へ御目見へ願はん、翌や取次せん物と、思し召たも恩が仇、そなたが連て立退しは、不届者と御勘當。自が身にも成てたも。世繼と定るあの志津馬、傾城狂ひに身を持崩し、萬一御沙汰有ては、と御前勤の願ひをさけしも、我子を思ふ夫のお情、世間の取沙汰口惜く、繼子繼母の隔有、柴垣とばし思やんな」と、夫に隨ふ貞女の道、云聞されて差うつむき、とかう詞もなかりしが、漸に顔を上げ、「何とぞ今一度、父上のお赦し有お詞を、お願ひなされて下さりませ」柴、テ、其事は氣遣ひ有な。一旦夫婦と成たれば、世間を守るが男の役。適の侍を、埋れ木となさん様もなし、命にかへて願ふて見ん。先それ迄は、自が部家へ行きや。早ふく」といふ折から、「澤井様御出」と、知せと共に打通れば、隔たる柴垣お谷をば、ちらと見るより空嘯き、物



後連—後妻

心を云々—心を置く(遠慮)にか

り驚く奥方も、「お出」と計詞なく、入んとするを、選ア、コレノ奥方、挨拶、御入なさるよは、先生の御病氣、毎日お見舞も得申さぬ、其御立腹が有ての義か、拙者  
 迎も病身故、お断の願ひを立、御前勤もとくより引て罷有ば、御不沙汰の段は御免下  
 され」紫何の、親御又左衛門様から、御懇な間柄、其御挨拶に及ばぬ事、成程成  
 程、其懇意について、いづぞはお尋申さふと存じたが、其元様は先生の後連、先奥方の  
 腹に出生の志津馬殿、今一人お谷殿と申、姉御が有たが、何時比からやらとんと見請申  
 さぬ。嫁入なされた沙汰もないが、やはりお屋敷にござるか」と、譯知ながら問かける、  
 そこに心を奥方は、何と返答口籠る、一間の内より立出る和田行家、病氣ながらも尖き眼  
 中、行よくぞく澤井氏、心にかけれられお見舞、過分々々一選「イヤ先生、存じたよりは顔  
 色も宜しく、珍重に存じます。扱今日参つたは、密々にお咄し申たき事有て、申奥方、ソ  
 レ冷るにお蒲團上られい」と、いふを立端に柴垣は、「娼共、燭臺持来いよく」と立て  
 行。股五郎摺寄て、「お咄しと申は別義でござらぬ。兼て貴公の家と、手前とは一家同然、  
 殊に拙者刃術のお世話に預りし先生、心腹を打割てお咄し合致す中、貴公様も御同然。そ  
 こを存じて、内分にて申上ふと存じ、參上致してござる」行、是はくお互に、御懇意に

致すからは、何事によらず承りたい。サ、御遠慮なふお咄しなされ」譯「イヤ別義でもござらぬが、正宗の刀、私に御譲り下さるまいかな」と、思ひがけなき一言に返答なければ、「サ、、、斯申た計では御合點參るまじ。斯うでござる。正宗の刀は質物に入てござる、筒様申せば、志津馬殿の事訴人致す様なれど、譯を申さぬと御合點が參るまじ。悪ふござるく。吉原の瀬川と申遊女に迷ひ、正宗の刀を質に入、身請の相談極りしと承る。エ、とくにも拙者存じたならば、御異見でも仕らんと存じた所が跡の祭。スリヤ正宗の刀は他家の物に成ます。そこを存じて、拙者方へ申請は、貴公なり手前なり、兩家に有も同然。御内談とは此義でござる」と、お爲ごかしに云廻す、心の内ぞ恐ろしよ。行コレハく日頃御懇意に致す間、妨めが不届、御世話下さる段、コレく手を突てお禮申。千萬忝ふ存じます。扱々不届な妨め。ヤモ此お世話御無用になさつて下され」譯「ソリヤなぜでござる」行「右の刀は、則私方へ請戻してござる」譯「ムウスリヤ正宗の刀は請戻したとな、夫は重疊。シテ志津馬殿はな」行「勘當致した。若筒様の義沙汰有て、萬一殿様より御尋に預りし時、申譯ないと存るから、右の刀を請戻し、御沙汰なき中、妨めは勘當致した」譯「ハテ氣の毒千萬、時に外にお頼申たいは、私未だ獨

三人云々行家  
お谷と澤井の三  
人

身しんでおりまするが、どうぞ姉御あねごのお谷殿たにどのを、拙者せつしやが妻つまに下くださるまいか。スリヤ掣せは子こなり。行家殿けいけだんの御家督拙者ごかどくせつしやが預あづかり、其内そのうちには志津馬殿しづまどのお心こころも定さだまれば、御渡ごわたし申まをすに相違ちがなし。是非たにどのお谷殿たにどのを申請まうしうけたい。此御相談このごさだんはどふでござるな」行いイヤ御深切ごしんせつかつたじけないが、其お谷たにめが事は、唐木政右衛門からきまさごもんと申まをす浪人なみのりと密通致みつつうし、家出いへでしたは四年以前よねねいぜん。箇様かやうの不届者ふせいきものなれば、勿論もちろん此奴このやつは七生迄しちしやうの勘當かんだう。貴公きこうも此義このぎは申まをすさいでも、能よく御存ごぞんじじで有ありながら、何かこりや御座興ござきようでござるの」と、何をいふても請付うけつけぬ、始めの恥辱ちじやくに股五郎またごろう、何がな見出し付みつけ込こまこと、白眼廻にらみまはせば立聞たちきお谷たに、三人一度さんにんいちどに見合みあはす顔かほ、立切たてきる障子しやうじ、驚おどろく行家けいけ、「コリヤコリヤ悪いわるく、今爰いまへ出ると身が武士ぶしが立ぬ。屋敷やしきに叶かなはぬ出てうせいと、サ追出おひだして置おきました」と、云紛いひまぎらせば高笑たかわらひ、選えんム、ハ、ハ、ハ、行家殿けいけだん何なにいはつしやる、娘むすめやることならぬならいやで濟事すじ。ナニカコリヤ手前てまへ小身者せうしんものと侮あなごり、嘲哢てうろうめき召めるの。ヤ恥辱ちじやくを與よへるのか。股五郎またごろうは武士ぶしでござるぞや、侍ごさむらひでござる。娘むすめは勘當かんだう致いたした、屋敷やしきに居ゐる物ものを追出おひだしたの、勘當かんだうのと、貴公きこう、殿どのの名代みやうだいにいつかちやう、一家中いっかちやうを納おさむる役やくではないか。サそれで御家ごか老職らうしやくといわれますか。志津馬しづまを勘當かんだう仕したといふは偽いつはりり、是も屋敷やしきに隠かくして置おき、正宗まさむねの刀かたな、貴公きこうが質しちに入いれたこうこうこで有あると、悪口あくこう雑言ざつごん出放題はうだい、こたへ兼かねて膝立ひざたて直ただし、「慮外りよごわいなり股五郎またごろう、儕おのれが

そくり上—上喉  
かし

鏝耶—唐山楚王  
の後の生みし鏝  
にて作りし名劍

しよげ島—悄然  
たる様

親又左衛門は、身共より上座の家筋、其勲と思へばこそ、劔術の弟子ながら禮義を以て  
あしらへば、申上る法外者。心得ぬやつと思へ共、何とぞして撓め直し、親の跡目を繼  
せてやりたさ、鏝の一手も教てくれた、師の恩を打忘れ、盼志津馬をそより上て遊所へ  
連行、正宗の刀を質に入させ、奪取て、それを落度にて我家を滅亡させんと、よくも工ん  
だ人非人め。こりや儕が智恵計でない。正宗の刀に望をかけ、頼んだやつが有ふがな。  
其頼人も合點たり。サア真直に白狀致せ。鏝耶が劔も持人による、性根腐た股五郎、病  
勞れても儕らごときに、正宗を出すにも及ばず、身が指料の此刀、工の腸引出して、洗  
ふて見せふか、何とく〜と、胸に覺への一々を、見透されたる股五郎、頼真赤にしよ  
け鳥の、返す詞もなかりしが、面目なげに顔を上、「ハア左様ぢや、誤た。相果た親共が義  
を思召れ、折節の御異見が耳に當た、癖み根性、彌つものる色狂ひ、放埒の友を拵ふと、志津  
馬殿を廓の魔道へ引入たは成程拙者。さふ見顯されてからは一言もござらぬ、好色に魂  
奪はれ、大恩の師匠を仇に存じた非義非道、只今夢の覺たる心地。御推量の通り、正宗の  
刀、拙者が持て何に致さふ。有様は色遣ひの金が欲しさ。そこへ付込、右の刀を奪取て  
くれるならば、金子千兩禮物に遣さふと、頼んだ者も外ならず、拙者めが一家ながら、思へ

荒浪一塵はすに  
胸に疊越し云々  
胸に疊みこむ  
うち疊の下から  
突出す白刃に行  
家斬られしなり

袈裟にずつばと  
質内を袈裟切  
にずつばと切放  
す

ばこいつが悪智惠の根本。かう打明て申上るは、今より心を改る證據。ア、假にも悪い工みは致さぬ事。もふくくく、ふつく懲りはてました。是迄の不届、最前よりの不禮の段々、先生眞平御免下され。コレく、かふ申た計では御得心有まい。彼正宗を望む物、拙者への頼みの書狀、御目にかけるが二心ない股五郎が申譯」と、取出す一通手に渡し、懺悔に誠を荒浪、誤り入たる有様に、心に油断はなけれ共、良病中の老眼に、燭臺引寄狀の宛名、澤井股五郎殿、同城五郎。「ム、さも有ん」と長文を、つぶく胸に覺越し、突出す白刃と右劔の抜打、眞向へ切付る。行「シャ門賊め」と付入て、澤井が肩先切付たり。此方もしれ者請流し、遺名を得し行家なれ共、初太刀の手疵に眼くらみ、請太刀に成てたぢくく、引よと見へしが飛違へ、澤井が肩間丁ど切。下より付込すくい切、脾腹をかけて切込太刀先、急所にや當りけん、どつかと座する椽の下、股の付根を貫く切先、立も立せずたよみかけ、非業の劔に和田行家、無慙の最期ぞ是非もなき。とどめの刀引ぬいて、疊あぐれば奴の質内、「澤井様お首尾は」澤「シイ主に見かへて身共へ加勢、速出かした褒美くれふ」「ア、忝し」と立寄質内、袈裟にすつばと邊りを見廻し、兼て工の股五郎、上段の床の間の刀箱取出し、蓋押開けば、こりやどぶじや、刀は

欠烏帽子一欠は  
懸

なくて狀一通。こは心得ずと星明りに透し見て、選ナニく、正宗の刀一腰、子細有て、私方へ預り申所實正也。和田行家殿、佐々木丹右衛門判、扱は刀は丹右衛門が預り居るよな。エ、無益の骨折口惜し」と、手疵にしつかと鉢巻締め、表は人目飛石傳ひ、裏道さして落て行。「曲者が入たるぞ。明しを持」と奥方の聲に、追々、妣共、折から駈くる丹右衛門、伏たる死骸は、「ヤアコリヤ行家様。先生を何者が手にかけてしぞ。今曲者が此小柄。コリヤ澤井股五郎、遠くは行まい家來共、表をかこへ」と、高股立、聞とひとしく家内の騒動、上を下へと立騒ぐ。桐が谷の裏道づたい、御勅使見送り奉る。跡押へは澤井の一黨、其身は素袍欠烏帽子、皆一様の御装束、君臣の禮義黙止がたく、星をあざむく高挑燈、事嚴重に見へにけり。備の中を股五郎、疵持足の裏道を、押分て打通れば、それと見るより野守之助、「股五郎殿ではないか。心得ぬ面體氣遣はし」と、聲をかくれば傍に寄、駈兼て申談せし通り、今日行家が方へ参り、何角事を謀しに、こつちの底意を氣取し上、法外成申分、骨髄に徹したれど、強敵の行家なれば、計略をもつて只一討併、残念なは正宗の刀、持歸らんと存じた所、丹右衛門が預りをする事、慥な證據はコレ此一札。ナニ城五郎殿、我是へ來りしは、一人の母の事、何卒御世話頼たい爲計。一家の

好みお頼申。一日にても生延ては、行家一家の奴原に、未練者と云れんは、家名の恥辱、一家の恥。我一人切腹致せば、跡の難義は氣遣ひなし。此世の名残おさらば」と、云捨てかけ出す。城五郎聲かけ、「イヤコレ〜先待れよ股五郎、身不肖なれ共澤井城五郎、おかくまい申たい。意氣地によつて討れしは、我々が頼みしより事起る。聞捨に致しては武士道の表が立ぬ。此上は我々が命にかけてかくまはん。先祖の意恨今此時。出かされたり股五郎。譬和田一家の奴原、君命を以て來る共、何程の事有ん。一時も早く屋敷へ歸り、評議を定めん。油斷は不覺の基なり。路次の用心氣遣はし、氣を付られよ近藤殿」近其義はちつ共氣遣ひなし、歸宅濟迄御役目、指でもさよば彼らが家の「一大事」と、備へを亂さず振出す、威光輝く鎌倉山、連て我家へ三重立歸る。

### 第三 圓覺寺の段

されば澤井股五郎、行家を討つて立退より、直に駈け込圓覺寺、門戸を閉して關、近藤海田、荒川、澤井を始、昵近の若殿原、若上杉より寄來る共、引はかへさじ弓鐵砲、佛の説し法の庭、平等大會に引かへて、修羅の街の大評定、方丈狹しと詰かけたり。股五

平等大會―平等大惠の誤にて衆生を平等に助け佛の道

彼等が家―和田一家

振出す―劍を振り出す

郎一禮し、「物數ならぬ陪臣の拙者、城五郎殿は一家の好、其縁に連御歴々の昵近衆、御  
 かくまひ下さる段、身に取ての面目此上なし。併ながら主人上杉憤り深く、拙者が母  
 を人質に取へ置、股五郎を渡さずば、母を成敗するとの難題、我故に一人の母を殺すも  
 不幸、且は好もなき昵近方、斯騒動に及ぶも氣の毒、やはり拙者を上杉へ御渡しなされ  
 下さるべし」と、邪智を隠せし賢人顔、野守之助進み出、「何さく、其遠慮には及ばぬ事。  
 此度我々が加擔するは、お手前の爲計でない、上杉には此方共年來の意恨有、武將の御  
 先祖、尊氏公より譜代相傳の昵近武士、元弘建武の古へ、尊氏公に粉骨を盡し、忠義を  
 勵みし我々が家筋、上杉を始、其外の諸大名は簾色のよきに從ふて、降參した腰拔の家  
 筋、我は顔に高祿を取、昵近衆を蔑に輕しむる日頃の存外、ことがな有と思ふ折節、お  
 手前をかくまふたは、上杉に恥を與へる爲さ。案の如く上杉此事を憤り、追付是へ押寄  
 んと、軍評定最中の由。今太平に治つて、茶の湯遊興に日を送り、鎧兜の著様も知ら  
 ぬ國大名、何程の事有ん」甲ヲ、サ野守殿の仰の如く、日頃筒様な事を待受、武藝鍛練の  
 我々、一まくり蹴ちらして、昵近武士の意恨をはらすは今此時。敵方より寄ぬ先、此方  
 から逆寄にして上杉に泡吹せん」乙ヲ、尤」と立騒ぐ。城五郎押止め、「ア、暫らくく。



思ふつぽー思ふ  
通り

のめくくとーお  
めくと

某が所縁有股五郎をおかばひ有何れもの御深切忝し。去ながら行家を討たる事の起りは、此城五郎が頼みし事。其子細は、此度武將の公達、御任官の御祝義に付、諸大名より名劔を獻せらる。然に行家が家に、持傳へし正宗の名作有、主従の事なれば、上杉是を取て獻上すべし。左有ば彌上杉が鼻高く、威をふるはん事心外至極、何とぞ此刀を奪取て、某が手より獻上すれば、我は勿論呢近衆の、手柄にも成と存じ、股五郎に云ふくめ、行家めをぶち殺さしたは、正宗の刀を取ふ爲計。思ひの外此刀、行家めが手にはなく、佐々木丹右衛門が預りおる由。股五郎を請取たくば、老母鳴海が命を助並びに正宗の刀を此方へ渡せよ、と難題の使者を立たれば、此返事の有迄は、暫くお扣へ有れよ」と、云間程なく馳來る門番の歩の者、「佐々木丹右衛門より今朝の御返翰」と、指出す文箱を城五郎、封押切て一通を、さらくと讀終り、城ホ、ウ城五郎が思ふつぽ。股五郎をお渡し有ば、母鳴海が擒を赦し、正宗の刀を遣はすべし、追付二品共、丹右衛門持參致さん此文言。後刻御出を相待居る、と口上を以て返答せよ」と、蓋引しむる明文箱、取より早く走り行。甲イヤサコレ城五郎殿、一旦かくまふた股五郎、今更のめくと上杉へ渡し、夫で武士が立ますか」乙チ、我々も其意得ぬ。貴殿は上杉が恐ろしいか、

比怯—卑怯

並居る中—此下に(を)字を入れて見るべし

臆病神が取付たか。比怯至極」と詰かくれば、股五郎押しづめ、「ア、どなたにもおしづまり下されい。イヤ城五郎殿、拙者が命は惜はせねど、武士の意地を立ぬく貴殿が、今に成て腑甲斐なく、上杉へ渡さふとは、エ、聞へた、行家をぶち放した計で、お頼みの正宗手に入ぬ御立腹、夫故でござるな」城イヤサ左様の事でない。今合戦に取結ぶとも、只世上を騒す計、望の刀が手に入ねば無益の沙汰。一旦和睦に事を納め、母の鳴海と正宗を請取た上、お身に繩打て心よく相渡し、使者の歸りを思ひがけなく、多勢をもつて引包、奪返す我工夫。いづれも必隱密く」と、聞て皆々勇立、「誠に智謀勝れし貴殿。左様ならでは叶はぬ所、然らば各其用意」と、騒ぐを押へて、城ア、先待れよ。謀は密なるを以てよしとすれば、某が詞を出す迄、いづれもお扣へ下さるべし。股五郎が後の災免れさする究竟の、忍び所は九州相良、密に落す用意萬端。ナニ吳服屋十兵衛是へ参れ、「ハッ」と答へて次の間より、小腰屈めて並居る中、怯す臆せず、畏り、土股五郎様のお身の上、委細とつくと承はりました。城五郎様へは、數年來御出入の私、相良へは商ひに毎年下る道案内、見込で頼と大切のお供、畏つたは商人冥加。多年の御恩報じなれば、ちつともお心置れますな。町人でこそ有心は金鐵、二人や三人は苦には致さぬ。

はやり雄一性急なる  
我へ一我一か  
琴を弾じて云々  
一孔明琴を弾じて  
仲達を退かし  
めし故事か

腕に請合けちりんも、掛直は申さぬ「吳服屋が、めつたに引ぬ太織地の男一疋頼もしよ。  
股五郎片頬に笑、「扱々氣味のよい男。敵持の供すれば、肌刀は放されず。行家めを仕留  
た時、コレ見よ弓手に二箇所の疵、忽治したる此薬は、城五郎殿の家に傳はる。南蠻國  
傳來の妙薬、身共を同道の人々へは、いづれも是を懐中さする。お手前もまさかの用意、  
此印籠を預るが、股五郎が一命を頼印」と渡せば、土是はく結構なお薬でござりま  
す。怪我と病氣は何時知ず。道中の肝心」と取納めたる折こそ有、又もかけ來る遠見の  
者、「上杉の使者佐々木丹右衛門、網乗物一挺、供はわづか三人、只今門前迄」城ヲ、よ  
しく。云付し如く門を開き、随分神妙に取はからひ、此所へ使者を通せ。ソレいづれ  
もは裏門より、先へ廻つて待伏の、用意くにはやり雄武士、我へ急ぐ裏門口、股五  
郎は十兵衛を引連、奥へ入にける。琴を弾じて敵を避、窺窺として檻笥の謀もや有ら  
んと、心赦さぬ丹右衛門、使者の禮義の上下も、四角四面の方丈へ、網乗物を昇入さ  
せ、しづくくと打通れば、城五郎威義繕ひ、「ホヲ聞及ぶ、御邊は佐々木丹右衛門とな。  
今日の使者大義く。今朝も言送りし通り、武士の意地によつて爭論に及ぶといへ共、か  
く靜謐に納りし代に、私の意恨にて合戦を取結ぶは、武將への恐れ有。罪は罪なり股五

送られつらんず  
送られたるべし

解死人ト下手人

刀は云々正宗  
の刀を渡す

身に老一身に負  
ふにかく鳴見に  
なるをかく  
是非も繩目一是  
非もなく繩目を  
とく

郎、望に任せ渡さんなれば、此方よりも望しごとく、正宗の刀、並びに老母鳴海が事、上杉殿より定て送られつらんずな」丹「ハア成程々々。主人上杉顯定、怒りの元は股五郎一人、逆礫の刑に行ひ、國の政道を正すべき存念、股五郎だにお渡し有ば、外に曾て子細なし。則是こそお望の正宗、並びに老母を誘引せり。イザ御改め下さるべし」と、箱に納めし持參の刀、取出せば手に取上、切先、物打、鉦元、とつくと改め鞘に納め、城「チ、聞しに違はず天晴名作、慥に落手」と引さけて立上る。丹右衛門引とぞめ、「ア、龜忽なり城五郎殿、股五郎を是へ出し、老母と互に取替さる中、むざと刀はお渡し申さぬ。サア解死人股五郎に、繩打てお出しなされ。ア、近頃我儘千萬」と、眼を配る勇氣の面色、城「チ、實に尤、是は身共が龜相。然らば刀は暫くそれに。追付解死人渡し申さふが、先其方の囚人、老母鳴海が替らぬ體」丹「チ、母に科なければ、最早繩目にも及ばず」と、乗物の綱取拂ひ、引出す姿縛り繩、子故に科を身に老の、恥と鳴海が憂思ひ、是非も繩目をほどこき捨、丹右衛門老母に向ひ、「子息股五郎を此所にて請取上は、其元が命を助け、城五郎殿へ渡すべき旨、今朝殿より仰の通り。彌承知成べし」と、聞て鳴海は顔を上、「誠に盼が不所存故、彼方此方へ御苦勞かけ、憎い奴とは思へ共、天地の間に親一人、子一人の股五郎

未練共比怯共笑ふ人は笑ひもせよ、どふぞ助けてやりたい、と思ふが親の身の因果。御主人へ對しては、不忠者の舁なれ共、母が命を助ふ爲、繩かよつて出よふといふは、此親には孝行者。老年寄た此母が詮ない命生延て、我子が刑罰に行はれるを、眺めて何の嬉しかる。お情返つて恨めしい。ヤイ股五郎此母は、何の様な憂目に逢ふが殺されふが、ちつ共構はぬ厭ひはせぬ。必爰へ出てくれるなよ。成らふ事なら此婆々を、替りに殺して股五郎が、命お助け下さりませ。悪人でも産だ子に違ひがなければいぢらしい。お慈悲く」と恩愛の、子故に迷ふ憂涙、とどめ兼て見へけるが、「ア、思へば誰にも恨なし。此科の起りといふは、よしない刀に念をかけ、成敗に逢も名作の、劔は我子の敵ぞ」と、云つと這寄棒鞘を、ずはと拔手も見せばこそ、ふるのくさりをかき切たり。「是は」とかけ寄る城五郎、佐々木も仰天乗物へ、手負を打込しつかと押へ、城五郎に目を放さず、底意をさぐる碇繩、又も大事と見へにけり。澤井わざと空とほけ、城コレサ丹右衛門、契約の通り鳴海を受取申さふかい」丹、いかにも科人股五郎を受取かはり、母が命は助くべしと契約は申たれど、御覽の通り、只今老母は自害致した。併此方の手で殺しはせず、我と我手に相果たは、某が存せぬ所」城、黙れ丹右衛門、構ふた股五郎を了簡して渡

棒鞘一圓き鞘の  
刀  
ふる一喉の宙

了簡して一承知  
の上

元の白地—元の  
通り  
くたばれ—死ね  
吃相—見暮

すは何故、老母を受取ふ爲計。親の命を子にかゆる大切の鳴海、なぜ殺した。元のごとく生て渡せ。左なくば澤井股五郎も、いつかなく渡しはせぬ。サア老母を早く請取ふ。サア何とく」と詰かくる。丹右衛門ちつ共騒がず、「鳴海が自害はいふて返らず。弟子として師匠を殺す極悪人の股五郎、目の前で親が死んだればとて、悲しむ様な奴でなし。況して縁者の城五郎殿、鳴海が最期を夫程に、惜まつしやる様がない。誠は老母が事は付たり、正宗の刀がお望でござらふがの。夫共刀は入ぬ、老母を生て返せとあらば、拙者とても詮方なし、約束變改元の白地、罷歸つて此趣、主人上杉に言上し。一家中是へ押寄、鎧先を以て股五郎を生擒にする分の事。人非人の澤井が母、死神の付たは是天罰、軍の血祭早くたばれ」と、手負の刀ぐつと引抜、「正宗の刀の切味、お望ならば御相伴なされよ」と、寄ば切んず吃相に、肝先挫がれ城五郎、「ア、是さくく丹右衛門、此方より事は好ぬ。ム、いか様能く思へば、自身覺悟の鳴海が最期、全くお身が業ではない。刀さへ渡し召るなれば、云出した武士の意地、さつぱりと立といふ物」丹、ム、スリヤ股五郎をお渡し有か「城」渡さいで何とせう。元より彼も覺悟の上。ヤアく、股五郎最期の時刻近付たり、尋常に是へ出やれ」「ハア疾より支度仕る」と、返答立派騒がぬ澤井、海

ズ 惡びれず一腫せ

老母死骸一老母の死骸なり立臨一立つにか

田荒川前後を圍ひ、其身は丸腰惡びれず、優々と座に直り、駭なにお使者御大義。傍輩を討た意趣の元は外でない。老ほれの和田行家、年に免じて立てやれば付上り、此股五郎を劔術の弟子などと、師匠顔が胸惡さ、何の苦もなく討放した。御身達に安々と搦捕るゝ股五郎ではなけれ共、身共故に一國の騷ぎと成が氣の毒さに、命惜まぬ武士の覺悟。城五郎殿イザ御政法に行はれよ」と、むすと座を組手を廻す。城ヲ、適々、其方が命一つで、騷動納まる國家の爲、恨と思ふな股五郎」と、捕繩たぐつていましめば、縁に つながらる城五郎、「身共が潔白見届けたか丹右衛門」丹「ハア是で主人が心も満足。扱此老母死骸を進上申さふか」城「イヤサ死人は入ぬ持ていにやれ」丹「然らば科人」城「其刀」丹「只今取かへ」城「請取ませう」「いざ」と繩付棒鞘を、渡す目配り、請取氣配り、互に屹度立別れ、「是で双方意恨もさつぱり」「老母が死骸は乗物に、此儘屋敷へ早急け」「おさらば」「さらば」と目禮も、龍の鯛を出て行、危かりける次第なり。影ほの暗き黄昏時、繩付引立て丹右衛門、前後を固めて行過る。思ひがけなき山門より、ぱつしと射かくる白羽の矢、膝にかつきと、丹「コハ如何に」と、引抜く間も又一筋、弓手の腕に立騷ぎ、周章驚く同勢が、中へむらく物影より、顯はれ出たる數多の武士、物をもいはず拔連て、

しどろ—亂れる

家來を胴切車、切斯伏せく、一文字に、切てかゝるを丹右衛門、前後左右に渡り合。其間に澤井を引包み、何國共なく奪ひ行。其南無三寶」と駈け行を、荒手を入替たよみかけ、既に危ふき其所へ、心ならずもかけくる志津馬、「スハ一大事」と拔刀、命限り根限り、火花を散す、三重強勢勇氣、相人は大勢身は二人、金鐵ならねば丹右衛門、數箇所の手疵刀を杖、「志津馬殿か、エ、口惜や股五郎を奪取れた。無念々々」と計かつばと伏。「ハアはつ」と志津馬もどうと座し、弱るを付入家來共、後れ馳に池添孫八、片端無切ほつ散し、志津馬をかこふ忠義の働き、お谷も斯と氣もそどろ、足もしどろに走り付、「ヤア志津馬は手を負つたか」進若旦那手は浅いぞ。コレ氣を慥にく」と抱起せば、志イヤ手疵には痛まねど、是が正氣を失なはずに居られふか、股五郎は手に入ず、正宗の刀は敵へ渡す、頼みに思ふ佐々木殿は此深手。いよく殿への云譯なし、運命も是限り」と、刀逆手に取直す。谷ア、コレ待た、そなたが今死で爺様の敵は誰が討」志サア其敵が討れぬ故此切腹」谷イヤくくく何ほうでも放しはせじ」と争ふ二人、倒れ伏たる丹右衛門、むつくと起て、「ヤレ志津馬早まるな、股五郎を奪取れたは最初より覺悟の前、正宗の刀は我手に有」志ム、すりや最前城五郎に渡されしは」其チ、サ、アレハ贖物。行家殿よ



此場を見遁し一  
股五郎の繩目を  
放して落ちやる  
こと

いつの世に下  
に報すべきの四  
字を略せり

り預りし正眞の刀は、いつかな渡さぬ誠の正宗。志津馬が手より主人上杉に差上、上杉公より、武將へ献上有時はお家の譽。是を功に敵討の願ひを立さす我工夫。とは思へ共城五郎は、音に聞へし刀の目利。贋物を突き付けは受取ぬ邪智佞人。先正眞を改めさせ、直様取て鳴海が自害、乗物の中の疵口で摺替た贋正宗。誠は是に」と乗物より取出す切柄、正銘の極めは爰に今際の鳴海、早たへぐの息の下、「股五郎が親の身で、丹右衛門様と云合せ、城五郎を謀りしは、どうで非道な舁めが、命は所詮叶はね共、殿様のお手に渡れば、竹鋸か礫の御成敗は知れた事、せめて武士らしく、志津馬殿と敵討の、勝負で死れば何ほう嬉しい親心。此場を見遁し下され、とお頼申て今日の時宜」丹「ヲ、サ老母の頼みはなく共、志津馬に討さにやならぬ敵。わざと敵へ奪取せ、丹右衛門一人が過りに成て相果れば、月日を見て本望遂、敵の首を先生の、位牌の前と身が墓へも、手向てくりやれ頼ぞ」と、最期の際迄師弟の義理。志我故命を捨らるよ、此大恩は何時の世に、かへすくも残念は、大敵の股五郎、志津馬が助太刀後立と、頼む此方に今別ると、心の悲しさ推量有」丹「ヤア不甲斐ない志津馬殿、丹右衛門は死する共、念の魂、此世を去らず。郡山の政右衛門こそ、我に十倍勝りし達人、早々歸つてお谷殿助

志津馬―沈むに  
かく

太刀頼むといはず共、彼が爲にも舅の敵、違背はあらじ、早さらば」老母「此世のさらば未  
來の門出、丹右衛門様」丹「鳴海殿、思へば今日の云合せ、敵と敵が修羅の道連、とどめは  
互に一太刀」と、落たる刀、指添を、よろめきながら取上て、眼は眩めど胸と胸、差貫い  
たる義士貞女、歎き志津馬も深手の弱り、家來が肩に敵の圍み、齒をくひしばつて立歸  
る、心の内こそ 三重せつなけれ。

## 第四 郡山宮居の段

諸君萬歳の祈とて、神に歩みを運ぶなりく。國の初めの其昔、誰名付てや郡山、御城  
下の見付筋、武家町人のわかちなく、引もちぎらぬ弓八幡、奉納願主譽田大内記殿、諸  
の番組数々も、打納りし隅田川、あらお目出たや、と上を見習ふ下がかり、頼てお立を  
松影に、列を正して待居たる。李助が聲高に、「何と能助どう思ふ。同じ様にいふは勿體  
ない事だが、殿様は遊藝がお好故、今日は何所の奉納、明日は爰じやのと毎日のお能、我  
我も其お家に奉公仕て居ながら、其氣のないは冥加ない事ではないか」と、いへば能助  
打笑ひ、「ハ、ハ、ハ、何を李助がいふやら。そりや我が藝氣が無いによつて、そふ思ふ。お

道明寺―河内道明寺より製出する稀有なる故

垢切―戦にて寒中手足の凍裂すること

らが親はきつい能が名人、名さへ軍陀羅夜又右衛門といふて、道明寺の祈りの段、面白い事だ」雀「コリヤ、能助、道明寺とはそりや干飯じやないか、必外でそんな事をいふなよ」熊「ハア、アノ諺の名は、チ、何とやら、チ、思ひ出した宗善寺」雀「コリヤおかしい、宗善寺とは津の國に有寺だはい」熊「そんなら我がのも違つた、道明寺は河内でないか。イヤ宗善寺に違ひはない」雀「ハテ片意地なもの。コリヤ能助、お身は藝者の子なら、狂言の心が有。何と稽古してくれまいか」熊「狂言覚えて何にする」雀「ハテ殿様がお好だ故、毎日々々此通り、いかに下々じやといふて、其氣の無いは何と不忠では有まいか」熊「コリヤ尤じや稽古してやろ。第一足取を稽古せい。サアおらが歩行くよふにせい」と、鳥居の馬場を能舞臺、子細らしげに身繕ひ、熊「ア、それ、手を振事はない、兩手をかうして。そふだく、歩行様を覺へたか」雀「チ、合點じやく」熊「ハテ垢切を切した時の歩行様と覺へて居よ。おらがいふ様に跡からいへよ、かやうに候者は此邊りに住居致す者でござる。頼ふだお方が狂言を好せらるゝ故、我々も稽古致さふと存ずる。太郎冠者有か」雀「ナイ」熊「エ、悪い覺へ」雀「イヤ、此返事に仕てくれい、奴を呼出すのは極つて有はい。身が前へ出あがらふ」熊「サアそれは芝居のせりふだはい」雀「ハアお前には

櫻田―櫻井甚左衛門

冥加ない―ない  
はなるの意  
狸々―能の名

ぬるくて悪い」熊エそんなら止しにせろ」と、あだ口々を云廻す。「お立」と觸る聲々に、恟り驚きしりく舞々かどみ扣へ居る。威光輝く大内記殿、奉納首尾能納りて、早御下向の先拂ひ、お徒御近習前後を配、鳥居前迄出給へば、御供には宇佐美五右衛門中扈從に召連られ、御前間近く引添へば、跡押へは櫻田林左衛門、指南の棒を振廻し、鼻高々と御供す。「暫く是にて御眺」と、宇佐美が詞に近習の武士、御腰掛を奉れば、遙跡より能太夫源之進、御傍近く手をつかへ、「今日殿様のお能、恐れながら驚き奉ります。いづくより出来させ給ひ、神も納受ましますさん。扱一家中、何方様もきついお上手。殿様の御機嫌の程御伺ひ奉る」と、申上れば打笑給ひ、大「ナニ源之進、是といふも其方が指南の徳」と宣へば、源ハアコハ冥加ない御詞、時の面目有がたし」と、退去て一禮のべければ、重て仰出さるとは、大「ア、浦山しいは源之進が身の上。我望は外になし、能太夫に成て狸々の亂れ、一世一代が仕て見たいわい。取分け今日の奉納も、我一人の力にあらず一家中の者迄も満足せねば奉納とは云がたし。殊に天氣も宜しければ、我悦び限りなし。太義太義」と有ければ、皆一統に頭をさけ、「ハツ」下計に平伏す。五右衛門御前に手をつかへ、「誠に殿様の御意の通り、今日は一入天氣宜敷御祈願の奉納、一家中の者は申上るに及ば

さへちれな一か  
けられるな

ず、我々迄も恐惶至極に存じ奉る。恐れながら五右衛門が御願ひの筋有、先達て御取次仕  
る唐木政右衛門義、劔術を申立、お家へ御奉公に出し候處、名のみ計にて、其器量有なきを  
御上覽に入奉らず。何卒林左衛門殿と立合の義、御高免遊され候様に御願ひ上奉る」と、聞  
も敢へず林左衛門「ア、是々々字佐美殿、御上へ對し恐れ多い願ひ。尤政右衛門殿とや  
ら、貴殿の御世話によつて劔術を申立、御奉公に出られた人。武士は相互、成程お望ならば  
相人に成て進ぜうが、そりやもふ蟪蛄が芥とやら申事さ。いかぬ事じやく、止しに仕め  
され。お氣にはさへられな、此林左衛門相人には餘りおとなけなく、何の夫が一溜りも有  
物か、殿にもをかしく思し召、ハ、ハ、ハ、ハ」と嘲笑ふ、林左衛門には見向きもせず、「右政右  
衛門義、不鍛錬成者杯と、影口を申者も候よし、左様成者に御知行を給はり候ては、取次仕  
る此五右衛門、一家中へ相濟申さず。是によつて政右衛門に立合の義、御願ひ申上候様と  
申聞せ共、彼も新參者の義故辭退仕る。何卒此義、御上より仰付られ下さらば、拙者が面目  
此上なし」と、餘義なき願ひに内記殿「武の道は尤なれ共、我其家に生れながら、劔術の  
事はとんと氣が乘らぬじや。政右衛門事は、家老共がきつい取持、兩人の立合何方が劔  
術善惡にもせよ、某が構はぬ事。家老共が得心せば、身が事は何時でも見物せん。今日

の奉納もとかく家老共不得心。そちは又未明より出て忠勤盡す其替り、餘り好ぬ事ながら、始ての願ひ聞届んも道ならず、政右衛門事は辭退致すと、兩人の事は、用人方へ云付てくれう。其代り近日若宮の八幡宮へ、春日龍神奉納仕たい。又家老共が何といはふと、其方が計ひせよ。ヤモとかく遊藝が樂しみが深い。願ひの通り聞届けた」と御上意の、詞に「ハツ」ト宇佐美が面目、忝涙に平伏せば、大内記殿仰には、「奉納の場所へ諸人の入込、神拜の恐れも有は、其方は跡に残り御神樂を上、社内の清め仕れ」と、云捨御座を立給へば、横に漫る櫻田が、御跡に引添ば、さどめき渡る御供先、駒の嘶き響の音、本城さして歸らる。御跡見跡り、五右衛門は一人言、「ハア遺 大家の殿様、是程にお好なさるとお能にかへ、林左衛門と政右衛門立合の勝負、御願ひ申たれば、早速に御聞届下さるよも、日頃の願ひ本望」と、社内をさして行折から、「申々」と松影より、呼かけるは女の聲、「何者成」と見合す顔、宇「お谷殿ではないか。面體あれし人相氣遣はしや」と尋ぬれば、お谷は涙押し拭ひ、谷「包むとすれど女の事、有様にお咄し申さん。國元から歸りてより、政右衛門殿の心底替り、出るにも入にも不機嫌。此刀を差出し、是を持って五右衛門方へ行、といふた計に物をも云ず。どふいふ譯やら合點行ず、問かへされぬ日

頃の氣質。御前に逢て様子もいはふと、其儘立て來りしが、通りかよりてお前を見請殿様のお立をば忍んで今迄相待し」と、刀取出し差うつむき、暫く詞もなかりける。宇佐美はつくづく打ながめ、「ハテ心得ぬ。ヲ、それよく、コリヤコレ我祕藏せし箴船の一腰。其方が親代と成たる印に遣はせしに、持せ越たは合點行す」と、引ぬき見れば物打に、卷添し一通、「コハくいかに」と解ほどき、見るより悔り、「ム、コリヤ此方へ暇の一札。様子が有ふ語られよ」と、詞にお谷は仰天し、「何わたしへの去狀とや。去るゝ覺へ微塵もなし。エ、聞へぬぞや政右衛門殿。科もない身をむごたらしう。去といふこと誰が始めた。お腹に十月たどもない身を、情なや」とかつぱと伏して泣居たる。五右衛門せき立、「エ、こなたも武士の娘でないか。魂の腐つた政右衛門、跡を慕ふ事はない。エ、口惜い、我眼の見へぬが誤り、天晴器量の有奴、何とぞ出世をさせんと思ひ、今出頭顔する林左衛門と、一勝負立合せ、武藝の器量をあらはし、一家中の手本とせん。さすれば殿にも遊藝の事お捨なされ、武道の道にお心をよせ給はゞ、お家のお爲と思ひしゆる。林左衛門と立合をすゝむれ共、辭退するは臆病風に引された大腰ぬけめが。此儘に相止めになりし時は、一家中の物笑ひ、願ひを上し御前の手前も云譯なし。エ、不甲斐なや」と計にて、

どふど座を組居たりける。お谷も俱に泣くどき、「夫の心の直る様、比怯者といはれぬ様に、コレ思案を頼む五右衛門様」と、取付歎けば、「チ、そふ思ふも尤。最前も殿の御前で、林左衛門めが我に向ひ、彼等を相人に立合はおとなけなし、と人もなけなる雑言過言、聞ぬ顔は何ゆへぞ。お家のお爲、二つには儕を出世させん物と、思ひし事も恩を仇。但し國元の騒動を聞、一家の縁を切所存か。儕ゆへには勘常請し此お谷、某が親となり女房に持せしに、科なき者に疵を付、追出しておこすのみか、親代にやつたる此刀の物打に、暇の狀を卷付しは、我を欺く憎い奴。心肝にこたへくくこたへて了簡ならず。年寄たれどもこの宇佐美、尖き刃金の切味見せん」と、一圖に凝たる國侍。お谷は取付、「マアくお待下され」と、縋るを拂ひ、空「ヤア愚かく、一先此方は屋鋪へ歸り、何氣もなくもてなされよ。我も跡より押かけて、事によらば先手を取て切かけん。其時こなたも此刀で、尋常に自害せられよ。未練に心残されな」と詞立派に云放す。谷「夫の心の善惡を」と、小褻凜々しく帶引しめ、勇まぬ心取直し、勇みいさむや庭神樂、打連てこそ三重立歸る。



## 第五 郡山屋鋪の段

直な唐木云々  
正直な唐木政右  
衛門にかく

昔は山の跡なれや、今も名のみは郡山。家中屋敷もつくろはず、直な唐木の柁目ある、家の柱は退去に、奥様役の留主預り、石留武介は忠義者、常の奉公裏表、内證、賄、闇しき、事所より妣共ばらくと立出、「コレ武介殿、今夜は内方へ嫁御様が見へるけな。おめで目出たい祝言振舞、わたしらもあやかる様に、お手傳ひに参りました」武「イヤ御苦勞御苦勞、小身の旦那政右衛門様、仲間一人下女一人。若黨の此武介が、料理人やら家老やら、人手が無さに、御家中の女中方を御無心。待女郎にも酌人にも各を頼みます」甲「娘、イヤ同じお給仕でも、祝言と聞ば氣がしよぎく。したが合點の行ぬ事は、お谷様といふ奥様、お里歸りなされてから、聞ば去られなさつたけな。まだぬくもりも涼ぬ中、新し女房を入るとは、餘りな手廻し」乙「サイノ、今度の奥様は何處からお出なさるのじや」武「イヤ我等もかつふつ存せぬ。何だか知らぬが旦那が一人呑込で、今夜嫁を呼程に、祝言の拵へせい、と云付て出られたから、何が俄に料理拵へ、少し計聞はつとた、海老の舟盛置鯉置鳥などといふ、しちむつかしい事は取置、鮎の吸物腹合せは、新枕の心じや

かつふつ！切

しよぎくーヤ

いかぬ物 出来ぬもの  
心置 遠慮

けな。肝心の鳥臺を忘れて、正月のお古を組かへて間に合す。いかぬ物は鈍子加への折形、知てなら折て貰ひ度い」甲「ハテ何の其様に義式せいでも大事ない。仲人さへない嫁入、今迄何處ぞにこつそりと、圍て有た女中で有」乙「ホンニあの政右衛門様も、お顔に似合ぬ色事師。先の奥様はお腹が立ふ。馴染の女房暇取して、跡へ来る嫁づらは、どんなお頬じや見てやりたい」と、さがない女子の口々に、うたて浮名の高咄し。愛事の思ひの種を身に持て、我内ながら心置、夫の留主を窮ひ足、娘目早く、「チ、奥様能ふお出なされました」と、いふに武介も押下り、「幸、只今日那のお留主、お歸りならばお知らせ申さふ。先お緩りと」とあしらふ程、いとど重る憂さ辛さ、「諸白髮迄といひかはした、人の心もかはれば替る、我内へよふ來た、といはれる様に成たはいの。身に覺へはなけれ共、親分の五右衛門様、どの様な誤りしたぞ、暇の印の此一腰、譯が立ねば受取ぬ、とお屋敷にも置れねば、立寄方もない身の上。見ればいかふ賑やかなが、お振舞でも有のか」と、問はれてそれとは云かぬる、跡先見ずの下女婢、「今夜はお屋敷へ嫁御がお入なされます」丙「ヤア嫁とは誰嫁。コレ武介、よもやそふでは有まい、と思へど若旦那殿に、女房が來るのじやないかや」武「イヤ其義は」娘「エ、武介殿、隠してもどふで知れる事。政

てつきりと一た  
しかに

右衛門様のお内義様でござります。下地から譯の有事かして、今夜俄の御祝言、わたし  
らも隣屋敷からお給仕に雇はれました。お前様は先の奥様。てつきりとお妾に、見替ら  
れなされたに違ひはない。ぐつとお惱氣なされませ」と、身にもかよらぬ下々の、法界  
惱氣に焚付られ、いとど重る口惜さ、包かぬれば見て取武介、「エ、コレ女中方役に立ぬ  
事云すと、お臺所に人がない、爐の炭もついで貰はふ」此「アイく合點じや。サア皆お出  
旦那のお歸り待女郎、こちらも嫁御の相伴で、よい夢見よふ」と打つて、立て行間を  
待兼て、かつばと伏て泣居たる。武「チ、お道理じやく。したが奥様、必惱氣なされま  
すなえ」アノ云やる事はいの。惱氣とは一通りの事。非業の死をなされた爺様、弟志  
津馬が敵討の、力と頼むはたつた一人。其夫、政右衛門殿縁切たれば誰を頼に大敵の股  
五郎、いつ本望が遂られふ。力も綱も切果し、と思へば胸が張裂る」と、歎けば俱に泣  
じやくり。武「お氣遣ひなさるとな。譬旦那がどふおつしやつても、拙者が命に代へて  
も此御縁は切しませぬ。惱氣なされなとはその事。お前様のお中には、政右衛門様の御  
世繼がござりますぞへ。去狀取ふが、後連が這入ふが、其お子さへ御平産なされたれば、  
切ても切ぬ血筋の縁、政右衛門様の奥様といふは、お中が證據のお谷様。敵討の助太刀

お中一お腹

人參子—大効ある子

蝶花形—婚禮の時に鈔子の蓋に飾る折紙

もく尻—あちつかぬ形容

も、頼の種の人參子、産月に氣をもんで、過有ばどふなさるよ。追付旦那お歸り有ば、  
 愠氣がましい顔なされす。兎角此内を動ぬ様になされませ。御合點が參りましたか。と  
 はいへ義理の有女房去て、嫁入の祝言のとは旦那はどふしたお心じや。拙者も一切合點  
 が行ぬ。ホンニ此蝶花形、私は折様存ぜぬ、お前様お頼申ます」と、いはれて手には取  
 ながら、みすく夫を寐取るよ、あた憎てらしい蝶花形、犬骨折て早ぶさの、鷹の餌に  
 成春の雉子。外に夫の聲聞へ、武アレ旦那のお歸り、暫く忍んでござりませ」と、家來  
 が情を力草、逢たい夫に隠るよも、疵持つ心唐紙を、押明忍び入にけり。心がけ有侍  
 は、地を這ふ蟲も氣を赦さぬ、唐木政右衛門、伊達を好まぬ刀の柄前、人に勝れし袴の  
 幅、上屋敷より歸り足、武介手を突、「申旦那、殊の外お隙入、御用の品は如何體の義で  
 ござりましたな」「サレバく、此間から辭退する、彼林左衛門と武藝の試、明朝正六つ  
 時、御前において立合へ、と押付て御家老の云渡し。今晚妻を迎へまする婚禮の中、一  
 兩日お延下され、と願ふてもいかな聞入ず、女房呼は私事、明日は延されぬと、去と  
 は心ない家老殿。此方は内へ氣が急く、もく尻に成て、漸只今。祝言の拵へ用意は出来  
 たか。ヤレく知行取にも飽果た。嫁の來る迄上下脱で休息せふ。枕おこせ女子共」武ア

佗の種！お谷が  
佗に來たと猶す  
る

聞かしー利かし  
ひつしよなく  
つうけんどんに  
彌左衛門裁一當  
時池永彌左衛門  
といへる有名な  
仕立屋あり

鹽一機會

「と返事もさし足に、角を隠せし塗枕、そつとかたへに奥様を、娘がはりの見へがく  
れ、袴は解ど胸解ぬ、鋭い常の侍肩衣、折てたよんで取直す、佗の種とは見付た夫、「ヤ  
イ武介、あの女子は何者じややい」谷「エイく、イヤあれは彼今日お目見へに參つた、新  
參の女中で」政「ナ、」谷「ハイ旦那さまお目かけられて下さりませ」政「フウ奉公人じや  
な。見かけから愚鈍そふな、不束な女なれど、遣ふて見てくれふ。コリヤヤイ今夜は身  
共が女房を呼びかへる、祝言の給仕申、付る」谷「アノ嫁御とお盃の、其お給仕をせいと  
は。そりや余り、イエサア余り急な御祝言。不調法な私が」政「給仕得せずば奉公叫はぬ。  
立て歸れ」谷「イヤく、申、何でも御意は背きませぬ」と、下女に成ても夫の内、離れ兼た  
る心根を、察して武介が呑込涙、「そふだく、奉公は辛抱が大事。何おつしやらふと、ア  
イクと、そこらを程よふ鹽梅加減。ドレお盃の用意せう」と、料理を鹽に立て行。折  
から「宇佐美五右衛門様御出」と案内す。政「ハア又堅ごふがわせられた。誰ぞ羽織持て來  
い」と云ぬ先から心得て、勝手覺へし女房の徳、氣轉聞して後から、著せる羽織をひつ  
しよなく、政「エ、子供ではないわい。差出女め彼方へ行」と、睨付られて是非なくも、立  
聞せはしく入來る五右衛門、彌左衛門裁の上下、こはばり切てむすと座し、「政右衛門殿、

果し狀一決闘狀

今晩は其元に嫁入が有と承、御祝儀申に參つた。老人の寸志ごとと御覽下され」と一通を差置ば、致、是はく、婚禮を祝しての御發句でがな。先以て忝し」と押開き見て驚顔、「ラウこりや拙者への果し狀でござるな。ハテ存じ寄ぬ、先其意趣の次第はな」「知た事、科ない女房何故去た」致「ハア拙者が女房を、拙者が去に、お手前様が何故の御立腹」五「イヤサイふまい。尤お谷は上杉の家中、和田行家が娘なれど、お身と密通して二人連、此郡山へかけ込だ勞浪の體不便に思ひ、且はお手前が器量を見込、殿へ申て有付せたは此五右衛門。其上勘當請て親の無いお谷身共が娘分にして、改てお身に突たれば、以前は行家が娘にもせよ今は身が娘、少しの見落し有とて、去られる義理ではないぞよ。一旦の恩を忘れ外の女房持かへて、五右衛門を踏付た仕方勘忍ならぬ。それ共お谷に據ない科でも有かそれ聞ふ。返答次第座は立せぬ」と鑿打たよいて詰かけたり。致「イヤモウ重々御尤千萬。お谷に微塵も科はなし。去た子細は別義ではない、飽ました。女房といふ物は、飽てからはもふく、片時も持て居られる物ではござらぬ。サ、ハ、ハ、お聞なされく、御立腹は御尤じやが、今拙者と討果されては五右衛門殿、殿への不忠に成ませう。なぜとおつしやれ、今日上より御意有て、明朝御前において、櫻田林左衛

サー  
ムリースツ

河豚の横飛―醜  
婦の形容

むかつき顔―佛  
頂面

門と、劔術の勝負を致す此政右衛門。是迄拙者を推擧なされ。明日も勝負見分の役目を仰付らると其元が、此立合も致さぬ中に、拙者をさつふりと切てお仕舞なされて、殿へは何と言譯はなさるよぞ。是非憤り晴ぬと有ば、何と致さう武士の因果、明日の御前を勤て、其跡でお手に懸りませう。暫く宥免下され」と、理に詰られてさしもの五右衛門、「コリヤ尤。遺恨は遺恨、御用は御用、明日迄は傍輩の役目、中よし〜」政「御得心下さるか、ア、忝い〜。然らば今宵はこれに緩りと、御酒一獻お上り下され。追付新しい女房が参る。イヤ又其器量のよさ、雪と墨との替徳。古女房のお谷めは、不器量の上に、因果と早ふ子を孕で、正眞の河豚の横飛。飽たを無理とは思し召な」と、愛想づかしを立聞の、障子に齒形も入計、登る痞を折しも有、「嫁御様早はへ」政「ヲ、待兼た早ふ通せ。女子共ソレ燭臺に火を燈せ。島臺銚子」と騒ぐ程、五右衛門がむかつき顔。玄關より奥座敷、直に手繰の鉞乗物、對の簞笥に染込の、覆ひも愛持介添女房、政「ヲ、太義〜。イヤ申、宇佐美公、只今カノ妻が参つた、お悦び下され」五「ア、御目出たい義でござる」政「御推量下され、貴公には御退屈。コリヤ〜彼方に御酒上いよ」五「イヤ拙者御酒たべると、胸が悪くござる」政「是は氣の毒、然はお菓子」五「イヤサお構ひ御無用」政「ハ

角菱止て一四角、  
ばらずに

いと様—大阪に  
ては女子の事を  
いふと俳言集覽  
にあり

嬰粟の花嫁—小  
く美しい花嫁

次の間—ツツ  
げとかく

テ堅くろしい、何がな御馳走。ヤイコリヤ新參の女、何をうろくまいくと、其不調法  
では、祝言の酌は得せまい。お客人の肝癢、ソレお背中でも揉であけい」と、いふ程腹の立  
波に、音を泣千鳥四海波、ねなぐちきりしかいなな 致「扱我等今晚の花聲、上下を著る筈なれど、あたまから打解る  
様に、角菱止て此儘の見參。サアく早ふ、女共の顔が見たいく」介「誦」ヲ、お心安い聲様  
で、嫁御様のお仕合、恥かしがつてござらずと、サアお出なされませ」と、乗物明れば綿帽  
子に、腰より上は埋もれて、七つ計のいと様御寮、尺にも合ぬ襦袢はらく、帯につられて座  
敷にとんと、「乳母是取てく」乳「ア、申、其帽子、お盃の濟迄台てござれ」致「ア、イヤイ  
ヤ鬱陶からふ、取てやりや。ドレ戀女房の御前像」と帽子取せば尺長も、縮らぬ嬰粟の花嫁  
御、直す三寶土器を、乳母が持添戴かせ、ごなほ 致「聲君様へ上まする」致「忝い」。女子共皆見  
てくれ、何とちよこりと、何處に置ても邪魔にならぬ、よい女房で有ふがな。ハア嬉しく  
目出たう一つ」次の間より 誦「千秋萬歳の千箱の玉と謠聲、襦の袖に通取乗せ立出る。  
「ヤアお前は母様柴垣様」と、驚くお谷に目もやらず、政右衛門に打向ひ、おどろ 致「頑はない此娘  
を女房に持て下され、此上の本望なし。聲引出の此目録は、主人上杉宇内様より勅志津馬  
に下されし、敵討御免の御書、いよく介太刀なされて下さるお心じやな」致「お尋に及ば



どれ合一野合

たはひーたはひ  
なし

す、承知致いて罷有。コリヤ新參の女もよく聞、身共には先妻が有たれ共な、親の赦さぬ密通、行家殿の勘當の娘。どれ合女夫の悲しさは、表立て掣舅といふ事はならぬぞよ。今郡山の扶持を戴く政右衛門が、よしみもない他人の介太刀が成べきか。コレ此お後は、世間晴た行家殿の忘れ篋、志津馬が妹に違ひない。此子と今祝言すれば、是こそ誠の掣舅、舅の敵小舅の介太刀仕る、と殿へ御願ひ申さんに、よも不屈とは思されまじ。かなたこなたを思ひはかつて、科もない女房、去た謂れは此通り。義理といふ色に迷ふて、五年の馴染に見替た心、汲わけて五右衛門殿、御立腹の段々は、まつびらく御免下され。我等もふ酔ました、何申やらたはいく」と、酒にまぎらす本性の、云譯聞て手を合せ、谷よふ去て下さんした。其誠をちつとの間も、恨だ女子の廻り氣を、堪忍して下さんせ」五ヲ、サ身共もよい年をして、疑ひの悪口面目ない。天晴武士かな政右衛門殿。此祝言は敵討の門出、武士道も立家も立、よい嫁を迎へられた。扱々ためてたい婚禮。我等もともくお取持」と、始の腹立打てかへ、一度に顔の色直し、政お心が解たれば、彌替らぬ政右衛門が、後連のお後や、二世かけて其方の男、今夜から抱て寐るぞや。コレ女房共くと、いへどお後は欠交り、「乳母もふ往なふ」とやんちや聲、柴「是は

あから酒の異名  
さもしい卑し

市松人形おもも  
ちやの人形

三國一三國一  
といふより富士  
と續け郡(水)と  
いふより解けて  
といひたり

娘とした事が、嫁入早々往んでたまる物かいの。三々九獻まだ濟ぬ、殿御の盃戴く物

じや」後イヤあからはいや。乳母あればほしい」乳「あれとは、ム、お餓かへ。さもしい奥様では行ぞ」既イヤく道理じやく。かわいひ女房に何惜からん。併一は過る、半分

は身が預る。是が夫婦のかためぞ」と持せばほやく鰻頭監。紫「ホンニ忘れた、嫁君の

御持參のお道具」と、箆笥の引出し廣蓋に、盛竝べたる持遊びの、市松人形風車歌「七

つに成子に、殿を持せ濟した、しやんく。謠濱松の、音はざよんざ。紫座はかはらね

ど我夫を、夫といはれぬお谷の心、思ひやつて居るはいの。そもじとはなさぬ中、ほん

の娘の此お後と、見かへさした繼母が、聲殿に悪性根付たと、恨でばし下さんな」谷「ア

勿體ない事ばつかり。わたしが縁の切るは、爺様へ不孝の云譯、政右衛門殿何時迄も、

あの子と添て下さるが、家の爲志津馬が爲。わしや死る迄、去れて居るが嬉しいわいの」

と明し合、親子の貞心三國一、思ひは富士の郡山、とけて涙を汲かはず、酒も裏に入り

めぐくと、夜も更渡れば、稚子が、「乳母もふ寐よふ」と乳さがす。乳「チ、此お子はいの。

七つに成迄乳啜る子が有物か。殿御の手前も恥なされ」既「イヤ大事ないく、是からが

新枕。 ぬ 共床を取、身も追付寐る。コレお乳母、女房共に尿やつて、寐さしてやりや」

立アと一立アと

腹一切腹

と痛はり心付々に、乳母のお藏が抱かよえ、寢所に伴ひ入ければ、政右衛門宇佐美が前に手を突、改めて五右衛門殿へ御頼、申上げたき様子有「吾サアく役に立すと、身共も力に成度い。何なり共遠慮なふ承ふ。どうかく」政ハア御深切忝し。近頃申兼たれ共、其元様には明日、切腹なされて下されい。其子細といつば、明六時、櫻田林左衛門と立合仰渡されし、此勝負に拙者負ます。サア知て有林左衛門が手の内、打つてぶち伏るは合點なれど、勝ば御前の御意に叶ひ、是より一家中の師範仰付けられ、お暇が出ぬ時は、介太刀の望が叶わぬ。御前において政右衛門、物の見事に打負、それを落度、知行差上、浪人して思ふ儘、小舅の介太刀致す所存。時には拙者が劔術を、風聽なされた其元様、負た我等が恥よりも、見損ふた御恥辱、よもや生てはござるまい、腹なされにや成ますまい。これ迄厚ふ御最厚下され、様々御恩に預りし、恩を仇と申さふか、腹切て下されと、申出すは五臟の血を、一時に吐よりも苦しけれ共、舅の敵が討たさ、志津馬に本望を遂けさしたい計に、斯様の不届を申上る、御赦されて下され」と、鬼を欺く政右衛門、わつと泣たる眞實に、感じ入て、吾ム、尤々、命進上申。何よりも安い事。只残念なは、林左衛門めに恥頼かよせんと思ひしに、返つて此五右衛門、面目を失

八つの袖—四人  
の兩袖

さぶり流—左分  
利の槍

ふて相果るは悔しけれど、貴殿が本望とけたれば、骸の上で身共が恥も、其時雪ぐ暫しの無念。誠有侍の爲に、皺腹一ツが役に立ば、身に取て大慶く」と、死るを常の武士氣質。政アレ聞たか。主人に預るお命を、我々に下さると、有がたいとお禮申せ、女房共」とはいはれぬ表、「親子共又云ぬが孝行」「勝べき勝負を負るも義心」「恥辱を取て御最期も、侍同士のお情」と、互に禮儀の中々に、涙催す八つの袖、時計の七つせはしなく、五「アレ早勝負の刻限近し。身は先へ登城致す。用意有政右衛門。貴殿のお暇、出るを相圖に、身共が切腹。御邊は直様鎌倉へ出立。冥土の出立、早參る」政「御苦勞。後刻」と式禮、性急武士の短夜や、明る間を侍最期の門出、いさんで御前へ。三重時過て早明六つ、知せの太鼓、朝日輝、大廣間、大内記殿上段の褥に著座、近習の武士、各見物晴勝負、政右衛門は大の竹刀、櫻田は兼てより、好む所のさぶり流、長柄を持て待かくる。双方呼吸の透間なく、先を取んと挑み合ふ。切先刃金はなけれ共、鏢を削る心の眞劍、打合ふ数は帳面に、見る人々も息を詰、暫く時を移せしが、兼て期したる政右衛門、櫻田が鏢先を、あしらひ兼たる手の狂ひ、竹刀がらりと巻落され、鏢にひはらをウンと計、がはと倒れて俯伏に、面目なふこそ見へにけれ。勢ひ込で林左衛門、「ナント何れも御覽

じたか。影で廣言は誰もいふ、まさか勝負にかよつては、生兵法が役に立物ではない。此様な拔作を、お取持なされた五右衛門殿、何と今御合點が參つたか。イヤハヤ天晴のお目利く」と、嘲哂譏りも覺悟の前、御前に向謹で、五不鍛鍊の政右衛門を吹擧致せし不調法、恐れながら申譯」と、云もあへず肩衣反ね退、差添に手をかくる。大「ヤレ待て五右衛門。あれ留よ」「御意ぢや。切腹先待れよ」と近習の聲々、ハツと計、暫し扣へて平伏せば、大「櫻田林左衛門唐木政右衛門、兩人共是へ參れ」二人「ハアハツ」と一度の答さへ、肩で風切櫻田と、唐木は枯し萎れ枝、見すほらしけに蹲る。大「ヤイ政右衛門、只今の勝負、大内記是にて逐一に見届、其方が致し方、神妙に思ふぞよ」と、仰に、政「ハツハツ」と計、夢見し心地、一座の不審、大「イヤサ其方共は、今の立合を何と見た。尤勝負には政右衛門負たれ共、始よりつくく見るに、身構へ太刀捌き、よつく鍛錬誠の達人、林左衛門が中々及ぶ所ならず。彼が心を察するに、新參の身を以て、古參の者に恥辱をあたゆるは、武士の情にあらず、とわざと勝を譲りしは、劍術計か心迄、奥床し頼もしよ。併ながら、是迄遊藝を樂しみ、武藝に疎き大名と噂に云れし大内記、劍術の批判、覺束なし共云べきが、弓取の家に生れし身が、武藝を知らぬ様有んや。然れ共、弓を袋

したるかを目云  
云一ひどい目に  
逢ふにかく

にし、太刀を鞘に納るは太平の掟、今足利一統に治つたる此御代、靜謐の世に弦を引鏃を硯、鏃よ弓よとひしめくは、上への恐れ家衰微の基、爰を思ひはかつて、茶の湯亂舞に日をくらせ共、心に捨ぬ劔術武藝よく知て居る。身共が眼相違有じ。政右衛門を取持し五右衛門、身が爲に天晴忠臣、誤りと思ふべからず。又林左衛門事は、怪我の勝をそれ共知らず、いかめしく罵るは、我藝の我手に見へぬ不鍛鍊千萬、知行くれるは國の費暇を遣はす。勝手に屋敷を立退べし」と、案の外成御詫意に、林左衛門一句も上らず。尖き殿の御賢慮に、恐れ入たる一家中、「御前に叶わぬ林左衛門、早立めされ」とせり立られ、したるかな目に大廣間、一人すこく立て行。「重て政右衛門にいふべきは、新參ながら其方、武藝の鍛鍊感じ入、二百石の加増申付る。黒書院にて改め盃。今より一家中の師範と成、彌忠義を勵んでくれよ」と、いと懇に仰有、しづく御座を御太刀持の、小姓引連入給へば、近習の面々ざよめきわたり、「さりとては政右衛門殿、けしからぬお首尾、おめでたいく。イヤもふお羨しう存じます。我々もあやかる爲、お盃が戴きたい、詰所に相待居ます。扱々々、お手柄く」と、挨拶悦び請る程、ぐはらりと違ふ胸算用、二人は顔を見合す計、只うつとりと手を組で、「政右衛門殿」政「五右衛門殿、是

ひねー米麥などの去年以前に熟したるもの

盛の梅―お谷  
荅の櫻―お後  
菊の間―聞くに  
かく

ではお暇は願われまい」五「サアく身共も、折角切かけた腹がひねに成た。コリヤマア  
どう」と腰もぬけ、一度に溜息次の間の、襖あらはに妻お谷、肩にかよりし柴垣が、喉  
に懐劔突詰し、母の自害に稚子の、お後も跡におろく目元。二人驚き、「何故の此生害」  
柴「イヤのふ是は覺悟の上。唐木殿の頼もしい心底を聞上は、此世に用のない體。未來  
へ參つて、娘お谷が勘當の訴訟。今日の様子を見届て、と此廣間のお次迄、隠れ忍んで  
委細の譯、思ひの外の立身で、お暇の出ぬは是非もなし、此上ながら姉も、妹も、やつぱ  
り此方様の女房と思ひ、敵討には行れず共、心の介太刀を、影ながら志津馬が力に成て  
たべ。兄弟共さらばよ」と、顔を見上見おろして、盛の梅と荅の櫻、跡に残して息絶る。  
姉妹「コレのふ是」と取付て、泣聲人や菊の間より、大内記殿の御簾中、久方御前立出給  
ひ、「改めて殿様の御詔意、政右衛門が今日の仕方、定て様子有べし」と、御窺ひなされし所。  
心の底に望有て、わざと我手練を隠し、主を謀りし趣、殊に御座の次の間へ女を引入、  
御殿を穢し科によつて、お暇を遣はさるよ。去ながら、暫しも扶持し置れし家來、浪人  
の糧に盡るも不便なれば、刀一腰、お暇の印に下さるよ。殿様御祕藏の信國の名作、敵  
討の餞別とはおつしやれぬ、賣代なして世渡りの、介にせいとの御慈悲。有がたふ頂戴

仕しやと、小こ性せうに持もたせし刀かた箱たばこ、打うち明あ申まさぬ心こゝろの底そこ、しろし召めれし御おん恵めぐみ、「エ、相あ果はし志し津づ馬まが母はは、今いま少すくし生い延えんはり、此こゝろ御ご説せつ意いを聞きくならばと、とどめ兼かたる有あがた涙なみだ、御ご簾れん中ちゆうも御ご落らく涙なみだ、「父ちちにも母ははにもおくれたる、其その稚わか子は手て廻まりて、養やしなひ育そだつる三さん世ぜの縁えん、殊あ更な姉あねは只ただならぬ、お中なかに持もちし大だい事じの身み、假かりの親おや分ぶん五ご右う衛ゑん門もんの屋や敷しきで、介かい抱ほう如じゆ在ざいなふ、本ほん望ぼうとけて立た歸かへり、元もとの主しゆう従じゆう對たい面めんを待まつて居ゐるぞと、つどとくくに仰おほせも重おもき亡なき骸がらは、宇う佐さ美みが屋や敷しきで野の送おくり、供ともにひかへし若わか黨たう武ぶ介け、「此この世よの名な残ごり、御ご殿てんの名な残ごり、始はじめの妻つまと後のちの妻つま、生なれぬ子こにも引ひるれど、返かへすくも大だい恩おんの、御ご前ぜんを拜はいし立た立た出いる、世よの有あり様さまこそ三さん重じゆうものうけれ。

## 第 六 沼津の段

東あづ路ちに、爰こゝも歌うた名な高たかき沼ぬま津づの里さと、富ふ士じ見み白しろ酒さけ名な物ものを、一ひつ召めせく駕か籠ごにめせ、お駕か籠ごやろかい参まふか、お駕か籠ごとと稻いな村むらの、蔭かげに巢すを張はり待まちかける、蜘蛛くもの慣なひと知しられたり、淨う世よ渡わりは様さま々に、草たの種ねかや人ひと目めには、荷に物ものもしやんと供とも廻まり、濡ぬ泊とりを急ふぐ二人ふたり連づ立た場ばと見みかけ立たちまり、旅たび人ひと「コレハしたり、大だい事じの用もちをとんと忘われた。太たい義ぎながらわしが寄よた所ところ迄まで、一ひと走はりしり、急いぎの用もち事じ走はり書かき、さらくと書かき認ため、「早はやふ早はや

稻村の云々一駕  
昇が立場に乘客  
を待つは蜘蛛が  
巣を張りて獲物  
を待つに同じ蜘蛛  
蛛に雲助をかく



えい程一いほ  
ど

ふ」と手に渡せば、主に劣らぬ達者もの、心安兵衛逸散に、元來し道へ引かへす。稻村  
蔭より、雲旦那申、お泊り迄参りませうかい。申旦那樣、どうぞ持して下さりませ。今  
朝から壹文も錢の顔を見ませぬ。どうぞお慈悲」と云かけられ、旅人「イヤ、わしは  
今夜は夜越に行」雲「サ、そこがお慈悲でござります」と頼かけられ是非なくも、旅人「サ  
サそんなら吉原迄何ほじや」雲「エ、お前様も、わたしが頼んで持のじや物、えい程に下  
さりませ」旅人「サそんならやらしやれ。年寄の止しにせいでの」雲「そんなら持して下さ  
りますか、エ、忝い。サアお出なされませ。ヤツト任せ」は聲計、一肩往ては立留り、  
「ヤ今日は結構な天気じやなア。ヤツトまかせ」二肩往ては息を繼「旦那申、向ふの立場  
に鱧の名物がござります。ヤツトまかせ」と、杖する度に追従口、深田に下りし白鷺の、餌  
嗜みをするにことならず。見るに氣の毒、旅人「コレ親仁殿、ちつと持てやりませうか。ア  
アそれくくあぶないく」雲「イエ、勿體ないく」旅人「ア、氣の毒な足元。最前  
から見て居るに、氣しんどでならぬ」雲「是はわたしが足の癖でござります。旦那のかけ  
で、今日も内入がござります」旅人「モウこなたも幾年じや」雲「七十に手がとどいてご  
ざります」旅人「ア、ソレくく、合點の行ぬ足取」雲「お氣遣ひなされますな、若い時

菫蕪の云々―菫  
蕪は腹中の砂を  
除く效あり  
茶めいた―ちつ  
な

は小相撲の一番も取ました。ヤットまかせとな」と、いふ下道の爪先上がり、木の根に躓きひよろくく。旅人「ソレ見やしやれ、エ、きつい事をしたの。親指を蹴かいたか。ヨシく早速に直してやろ」と、用意の藥取出し、付ると其儘、「何とどふじや痛は止るが」「コレハ結構なお藥でござります。痛はとんと直りました。サアくお出なされませ」「イヤコレく、荷はおれが持てやる」「ア、旦那様滅相な」「イヤサ駄賃はやる、氣遣ひさしやんな。此方の足元、最前からあぶなふてく、荷を持つ方がやつと氣樂な。咄しもつて行ませう。サアくござれ」と先に立。平作は千鳥足、しんどが利に成菫蕪の、砂に成かと思しさに、小腰屈めて、平「申旦那、一肩やりませうかい」具イヤく是で大分歩行よい。ア此方の足元、茶めいた物じやの。其足取を狂言師に見せたいわいの。亂れ杯と云て、傳授事に成そふな事」平「イヤ旦那のおつしやる通り、大概亂れかよつておりますはい。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」と、道の伽する笑ひ草、踏分て來る道草に、菊の折枝持そへて、見合す顔は「父様か」「お米じやないか。今日は結構な旦那の供したので、荷は持たずにお世話に成た。お禮申てたも」平「コレハく、有難い。もふ爰がわたしが内、暫くお休み遊ばしませ」と、昔の残る風俗も、お葉打枯し松影に、伴ひ入や西日影、侘た

おかけ—笠をか  
けると腰かけら

せきなげ—下水

大切な物—餘  
程大切な物  
はた—愛想  
よく

る中の二人住、門の柱に印の笠。平「おかけなさるりや庭一ぱい。いつそ座敷へママお上り」と、親仁が馳走娘の愛、前垂の藍薄く共、「ママお茶一つ」と差出す、こほれかよりし薬屋賣、「折悪ふ湯も沸かず、水で成とおみ足を」且「チ、イヤ／＼もふ行まする。扱娘御はよい器量、不躑ながら此内には、せよなげに咲た杜若、よい床へ活たいのふ」平「ハイどなたも左様におつしやります。自慢で作つて置ましたれど、近頃は手入が悪さに、いかふ田地が荒ました。何が身に構はず賃仕業、貧乏は苦にもせず、それは／＼孝行にしてくれませす。それで私が年寄りの蜘蛛助も、せめて三文なと肩休めと、余り彼女がいぢらしさでござります」且「コレ父様、始めてのお方に其様なさもしい咄しを」平「ホンニそふじや。ハ、ハ、ハ、ハ、イヤおよね、今日は大きな怪我を仕てな、コレ／＼／＼是見よ、爪が起てある。ア薬もあればあるものじや。あなた様の薬、きつい妙薬、ありや何と申薬でござりますへ」且「此薬は大切な物。第一金瘡には、其場で治る妙薬。武家方には尋れ共、金銀づくでは手に入ぬ妙薬」と、語れば娘は猶ほたく、「父様の命の親、一日や二日で、お禮は云も盡されず、ならふ事なら、今宵は爰に御逗留遊ばして」父「ア、娘何いふぞい。こんな内に泊まして、肴は干鰯が一疋なし、虱より外あなたの身に付物はない」

しなつこらしう  
一懸に  
目の鞆抜けし  
恰柄なる

物はかなしい物  
しかな

且「イヤ、不自由は仕付て居ます。娘御があの方に、しなつこらしういはしやるので、何ふやら爰に根が生た。大事なくばいつそ泊て貰ふかい」と、目の鞆抜し商人も、上手な娘の響應に、ころりと成ば「お枕」と、油氣はない眞身の馳走、是も一樹の笠舎り。尋る軒の目印當に内に入、安「旦那是にござりますか、サお立なされませんか」且「ホ安兵衛か、早かつた。そなたは其荷物を持って、吉原の鍵屋で宿を取りや。日和が知ぬ、早ふ行や」兩具の用意は吉原の、鍵屋をさして急ぎ行。お米は立て門の戸を、引立んとする所へ、「平作殿内にか」とぬつと這入は、原の町の古道具屋、「エイ市兵衛様、御苦勞にようお出」商「イヤ此方も商賣づく。昨日こなたの云しやるは、急な入用錢三貫、道具諸式を直にして取てくれといふことなれど、代物見てからの事、と手附に三百進せて、残りの錢持て來た。駄賃出しては合ぬ仕事、直が出来たら、こな様が荷ふて來て下さるか。時にと、道具といふは、見へ渡つた此通りか。こりや聞たとはきつい相違。マア、第一、放しにくいと云しやつた故、見込に思ふた佛壇が、こりや百が物はかない。テモマアちよつと置いて見よ。二つ土竈、鍋釜かけて、百廿と入い。古疊八疊で三百よ。鼠入の膳棚百五十文。流盤は役に立ぬ、是十六文。破障子一枚十二文。縁の取た角行燈八文。有増こ

ひよんなー飛て  
もな

慢直しー運なは  
し

んな物、家ぐち毀つても壹貫が物はない。というて手附の三百は飛で仕廻てもふ有まい」  
平「御推量の通りでござります」画「せふ事がない、此疊まくつて往のふ。コレ若い、そこ  
退て貰ひましょ」と、疊はたく上かける。「申々御尤なれど、今夜の所を御了簡」と親子  
が詫る氣の毒より、ひよんな所へかより合、且「コレ道具屋殿。わしは今夜泊つた客。是は  
難義な所に泊り合した。とんと煤拂に茶屋へ往た様な。どうで埃はかづかにやならぬ、  
手附はわしが返しましょ。疊は此儘置て貰を」と、奇麗に捌く貳朱一つ。画「是は結構な且  
那殿、ちと多けれど、爰迄来た賃、次手に疊も引直し、慢直しに平作殿、貧乏神の居ぬ  
様に、箒でお上、槌で庭、薬の出ぬ前お暇」と、躓き廻つて立歸る。親子一度に手を合せ、  
「忝い共面目ない共、嬉しいと術ない涙が、ごつちやに成て、お禮の詞も出ませぬ」と、  
破れ疊に喰付ば、且「ハテ今のは今夜の宿錢。高で知た親子の世帯、家財を賣代なさふと  
は、よくく差詰つた難義な事が有るのでござんせう。いとしゃ苦勞さつしやるの。親仁殿、此  
娘御より外に、もふ子供衆はないかいの」平「ハイ此お米が上に、男の子が一人有たれど、  
二つの年養子に遣ましたが、又其親の手を離れ、今は鎌倉の屋敷方へお出入、よい商人  
に成て居るとの噂、それ聞てとんと思ひ切ました」且「ソリヤ又何故に」平「ハテ一旦人に

かたしー一本

遣たれば、捨たも同然。我子ながらも義理有物、今其躬が身上がよいとて、尋に往て、箸かたし貰ふては、人間の道が濟ませぬ。今出逢てもあかの他人、子といふは此娘一人。且「ム、それも尤。其兄貴は今幾歳位じやの」「ハイ斯うつ丁度今年廿八。鎌倉八幡宮の氏地の生れ、母の名はとよと書付、守り袋に入れて遣ました。其後此お米を産で、母も相果、則今日が命日で、孝行な娘が水手向。花の立方御覽じやつて下さりませ」と、何心なき咄しの合紋、一々胸にこたゆる十兵衛、思ひ合せば覺有、扱は産の親父様、血を分た我妹が貧苦の有様。有合せた路用の金、なま中親子と名乗ては、受ぬ氣質を何とがな、金の遣たい屈詫に、胸を痛めて、十コレ親仁殿、何と物は相談じやが、此娘をわしに下されぬか「平エ、奉公に上ますのか」「イヤテヤ、まだ女房のない男、利發な娘御、商人の鼻には、極上々の羽二重地。得心して下さるなら、仕拵へはこつちから、旅商人の事なれば、呼迎へる日限は、未だいつ共定められぬ。嫁入の拵へ料、爰に少々持合す、是置て逝ます。得心かいの、どふでござんす。コレよい女房、面目ないが最前から、わしやこな様に惚たわいの」と、しなつきかければ、ついと退、孝父様、あのお方もふ逝なして下さんせ。いかに貧しう暮して居る連、あたまめ過た、あほうらしい」と、打てかはり

あたまめー無禮  
にてあたまは罵聲

ズつぶりーとつ  
ぶり

どんざー布子

し腹立顔、平「エ、嗜め、よい女房と云れるが、何のそれ程腹の立事。我器量がよい故じやと、おりや嬉しい。イヤ申あなた様、能ふ御深切に惚さしやつて下さりました。ジャガ此お米は女房といふてはやられぬ譯がござります」十「ム、そんなら御亭主が有のか、是はく。イヤ實は只今のはほんの座興、主の有人共存ぜず龜相申た、眞平御免に預りませう。コレ娘御、機嫌直して貰ひましょ」考「アノ痛入たお詞、ほんに思へば在所者の、おなぶりなさるを眞受にして、お恥かしや」とにつこりと、笑ひに心打解て、咄しに紛れてずつぶりと、平「日の暮て有に氣が付なんだ、三日月様が上つてござる。宵月夜で灯は入ぬ。御明しを伽にして、辻堂の雨舎り、お客様も最ふお休、足延すと壁につかへる奥座敷、緩りとちどかまつて御寐なりませ。私は此臺所、コリヤ娘は、其方に寐い。旦那様はお堅いけれど、時のはづみでは、主の有池へ踏込なさりよも知れぬ。用心には旦那様は、網を張じや。今夜はおれが股引をはいて寐や。寒けれどあなたには、わしがどんざを裾になと」追風もてくる鐘の聲、いとしくくと聞へける。お米は一人物思ひ、心にかよる夫の病氣、我手で介抱する事も、浮世の義理に隔られ、秋の螢の消残る、佛檀の灯もほそくと、嵐にふつと氣の付娘、「奇妙に治つた父様のあの疵、今でも敵の手がかりが

もじきなカー  
一文銭

知てから、あの病氣では思ひも寄ず、ム、」と心で點頭胸をすへ、灯の消たるは天の與へ、  
 夫の爲と拔足さし足探り寄、印籠取上立退足、躡く音に目覺す十兵衛、思はず高聲「何  
 者」と、裾をとらへて引とむれば、「わつ」と泣入る娘の聲、平作も悔りし、起上ても眞暗  
 がり、「お米く」と云つと探す籠の埋火、付木にうつし顔見合せ、平「娘じやないか。且  
 那樣か。何故に此有様。エ、何の因果で此様な、情ない氣に成たぞいやい。コリヤ此親  
 は、其日暮しの物じやけれどな、人様の物もじきなな、盗もと思ふ氣は出さぬはいやい。  
 エ、親の顔迄、穢しおつた」と、わつと計に泣居たる。十兵衛は氣の毒顔、「金銀を取たと  
 いふではなし。是には譯の有そふな事」と、問れて、お米は顔を上、「恥かしながら聞て下  
 さりませ、様子有て云替せし、夫の名は申されぬが、わたし故に騒動起り、其場へ立合  
 手疵を負、一旦本復有たれど、此頃は連りに痛、いろく介病盡せ共印なく、立寄方も  
 旅の空、此近所で御養生。長しい間に路銀も盡、其責に身の廻り、櫛笄迄賣拂ひ、最  
 前もお聞の通り、悲しい銀の才覺も、男の病が治したさ。先程のお咄しに、金銀づくで  
 はないとの噂。燈火の消しより、アノ妙藥をどうがな、と思ひ付しが身の因果。どうぞ  
 お慈悲にこれ申、今宵の事は此場切。お年寄しお前に迄、苦勞をかけし不幸の罪、今日



瀬川―お米の妓  
の時の名、川に  
かく

や死ふか翌の夜は、我身の瀬川に身を投てと、思ひし事は幾度か。死だ跡でもお前の歎  
きと、一日ぐらしに日を送る。どうぞお慈悲に御了簡」と、東育ちの張もぬけ、戀の意氣  
地に身を碎く、心ぞ思ひやられたり。歎きの端々つくぐくと聞取十兵衛、「コレ姉御、そ  
んならこなさんは、江戸の吉原で全盛の、松葉屋の瀬川殿じやの」米「ハイ、テモ能う御存  
じ」且すりや瀬川殿の夫の爲に、「ムウく」と心の目算思案を極め、「イヤ太夫殿、夫  
の手疵を治す藥ほしいは尤。それ聞ては進ぜたい物なれど、是は人の預り物、此事は思  
ひ切つしやれ。今此方衆の咄しの通り、わしも又恩を受た、サ其恩を受た人の爲に、い  
づれの寺でも苦しうないが、石塔一つ寄進が仕たいが、何と世話して下さるまいか」平「そ  
れは御奇特、結構な寄進でござります。いつ成共お世話致しませふ。私も來年は暁が年  
忌。勸むる功德俱に成佛とやら、是非お世話致しまするでござります」土「どうぞ今度の  
下り迄、違はぬ様に頼ます。兼ての願ひに、書付も此内に委しふござる」と、金一包取出  
し、「コレ必頼んだぞや親子の衆。最早夜明に間もなし、随分無事に親仁殿」と立出れば、  
平作も、「必お下り待まする」土「姉御さらば」とばかりにて、心に一物、荷物は先へ、道  
を早めて急ぎ行。跡に親子は顔見合せ、金取上て、「コレおよね、随分大事にかけておき

水入ちザー親密

我—も前

や。夜明迄は間も有、そなたも休みや」と水いらす。見廻す傍に落たる印籠、平「ア、是は今の旦那のじや、定て尋てござるで有」と、いふにお米が手に取て、「此印籠はどうやら覺への有模様、ハテ合點の行ぬ」それか是かとよく眺め「ホンニそれよ、こりや澤井股五郎が、常々持し覺への印籠。ハテ不思議な」と平作も、金取出しよく見れば、金子三十兩、「此書付は鎌倉八幡宮の氏地の生れ、稚名は平三郎、母の名はおとよ。コリヤコレ、我子に付て置た書付」米「そんなら今のお方は、私が爲には兄様」平「チ、我子の平三で有たかい。そんなら最前からの深切は、それとはいはず此金を、貢でくれた石塔代。不思議の縁」と親と子は、暫しあきれて居たりしが、お米は印籠手に取て、裾ばせ折て駈出す。平「コリヤ待娘、コリヤどこへ」米「何處へとは父様、此印籠を持って居る、其兄様は敵の手がかり、追かけて股五郎が有家を尋ね、志津馬様へ」平「尤じやく、が我ではいかぬ。年寄たれ共此平作、理を非に曲ていはして見せう。我も續いて跡から來い。どの様な事が有てもな、必出なよ。敵の有家聞迄は大事の場所、木影に忍んで立聞せい必とも倉忽すな。合點か。北海道は廻り道、三枚橋の濱傳ひ、勝手覺へし拔道を」と、子故に迷ふ三惡道、轉つまろびつ走り行。跡にお米は身拵へ、續いて出んとする所へ、折

柄來かよる池添孫八、「瀬川様か」ホシハチ孫八殿、よい所へござんした。今夜爰に泊つた客で、敵の手筋が知れそふな。詮義の爲に吉原迄、とよ様が行しやんした」「イヤ忝いな。シテ其行先は、吉原迄はよも行くまい。何角の様子は道にて聞ん」と、瀬川に續く池添も、足に任せて三重したひ行。實に人心さまぐくに、町人なれ共十兵衛は、武士も及ばぬ丈夫の魂、夜深に立し獨旅、千本松にさしかよる。平「チ、イク」と、杖を力に息すたく、申々旦那様、ヤレ〜お早い足元」チ「フウ今呼だはこなたか。あはたどしう何の用」平「イヤ只今のお金を戻しに參じました。石塔料と名を付て、大枚の金子三拾兩、其日暮しの蜘蛛助に下さるにも譯が有、又請まするにも譯が有。けれども此金を請ましては、去人が立ぬ義理がござります。是をお返し申ます代りに、貴方にお頼がござります。お聞なされて下さりますか」チ「ハテ一夜さ泊るも何ぞの約束、様子に因つて頼れまい物でもない」と、夕闇の夜の聲しるべ、跡より窺ふ池添瀬川、片唾を呑で聞居たる。チシテ其頼の様子は「平」ハイ仰つて下さりませ。此印籠の主の有家を承はりたふござります。是を尋て知たい計に、さまぐくの流浪致す人、それ故娘も廓を出て憂艱難、是が知ると本望成就、娘につれて私迄、サ、サ、サ、此上の悦びはござりませぬ。二拾や三拾のはした

道分石―別れ道  
に立つる案内の  
石

掛籠―印籠の中  
蓋

錢で、露命をつなぐ、私が、死る迄安樂に暮される程の三拾兩、其金銀にかへてのお願ひ。  
七十に成て蜘蛛助が、ここに叶はぬ重荷を持、それはまだ休みもする、子の可愛ひといふ  
おもに重荷は、寐た間も休まぬ一生の、苦痛を助る藥の名。お前様も親御が有ば、子故には愚痴  
に成物じや、と思し召やられて、願ひを叶へて下さりませ。コレ申、旦那様」と、血筋と義  
理と道分石、わけて血の緒の三界に、踏迷ふこそ三重道理なれ。親の心を察しやり、土ム  
ムそふ有ふ、心底至極尤じやが、是計はどうも云れぬ。おれも頼れた男づく、其方の人  
が大切なら、こつちにも又大切。譬、又有家を聞ても、命がなふては本望は遂られまい、  
そつちの内うちに落して置た、主ぬしのない印籠いんろうの、其妙藥で疵養生きずやうじやう、達者たつしやに成た其上では、望  
の叶ふ時節じせつも有ふ。親仁殿おやじどの、サアそふじやないか」と心の掛籠かけこ、一重明いちぢやうめいけぬ十兵衛じゅうべゑが情  
の詞ことば。平「サ、それ程お慈悲の有ある方かた、逆さかものことなら其藥の持主もちぬし」土イヤサ、コレ悪い合  
點てん、此藥の持主もちぬしは、其病人とは大敵藥だいてきやく。三十兩の其金、敵かたきの恩を受うけまい爲、戻したでは  
ないかいの。此持主の名をいへば、敵かたきの藥で疵本復きずほんふく、恩を請うけてはまさかの時、切先きつさきが鈍  
らふぞや。ヤツぱり拾ふた藥くすりにして、心置こころおきなふ養生やうじやうさしたが、よさそふに思はるよ」と、  
聞て平作へいさく感じ入いり、「アツそふじやあつた。エ、お前様は、恐ろしい發明はつめいなお人じやの。そ

アレ聞たかーそ  
れとなく娘にい  
ふ詞

ふ聞ましては、申様もござりませぬ。左様ならもふ歸りましよ。旦那様おさらば」と云つと探つて十兵衛が、脇差拔取、腹へぐつと突立る。イヤア〜〜何とした〜。コリヤ自害か、何故に誰を恨で勿體なや」と、うろ〜涙驚く娘、聲に手當る池添が、泣音とどむる轡虫、草に喰付泣計。平作苦しき目を開き、「おりや此方の手にかよつて、死るのじやはいの〜。ハテ此方とおれとは敵同士。志津馬殿に縁の有此親仁を殺したれば、頼れた此方の男は立。コレ〜、此上の情には、平作が未來の土産に、敵の有所を聞して下されいの。外に聞者は誰もない。今死る者に遠慮は有まい。不思議に始めて逢ふた人、どふした縁やら、我子の様に思ふ物。何の此方に、引氣取す様な事此親が、サア此親仁が致しませうぞ。是が一生の別れ一生の頼み。聞ずには迷ひますはいの〜。コレ拜ます〜旦那殿」と、子故の闇も二道に、わけて命を塵芥、須彌大海にもまさつたる、誠の親に始て逢、名乗もならぬ浮世の義理、孝行の仕納め。イヤ何處に誰が聞いて居まい物でもなければ、十兵衛が口からいふは、死で行こな様へ餞別、今際の耳に能ふ聞つしやれ。股五郎が落付先は九筋相良、道中筋は參筋の、吉田で逢たと人の噂「平エ、忝い〜。アレ聞たか、イヤ〜誰もない〜、聞たは此親仁一人。それで成佛仕ま

すはいのく。名僧知識の引導より、前生の我子が介抱受、思ひ残す事はない。早ふ苦痛を嘗て下され」親子一世の逢初の逢納め、且親仁様」平兄、エ、顔が見たいくく、顔が見たいわいわい」上南無阿彌陀佛、なむあみだくく」と唱ふる十念十兵衛が、こたへ兼たる悲歎の涙。始終窺ふ池添が、小石拾ふて白刃の金、合す火影は親子の名残、跡に見捨て三重別れ行。

## 第七 關所の段

白齒―知らずにかく

藤川の新關と、人には云ど影の郷、一村籠る松影に、茶屋の娘のお袖とて、年は二八の跡や先、まだ内證は白齒の娘、雪氣厭はぬ寒空に、水の出花や煎じ茶の、佛をだしに參詣人、黒谷の御上人、鎌倉へ下向の道、山中の法僧寺に今日で三日の御逗留、御符御札のお影にて、瘡が物いふ聾が治る、膝行のお祖母が禮參り、御禮參の三人が、茶屋の床几に腰打かけ、且何と太郎兵衛、きつい人群集の。扱皆聞しやれ、御符のお影で奇妙な事がござる、吉田の宿の搗栗屋といふ炭屋の子が、痲瘡で目が潰れ、何が一人子の事故、夫婦の衆が發心して、罪亡しに西國に出る所へ、上人様の御立寄、何か御符を戴くやら、聞

花香―茶の入れ  
たて  
汲て―茶を汲む  
と心を推察する  
とかく

しやれ、其夜から目が明ましたといの。それから吉田中がひつくりかへし、山中がお泊り故、毎日の参詣人、有難い事ではないか」乙「ハテそりや其筈いの。炭屋の子なら、黒谷様に御縁が有、ハ、ハ、ハ、ヤ、こちらも逝で縁の有、嗚が焚いた御符をば、戴きませう」と打笑ひ、我家々々に歸りける。父の教を守らざる、其罪科の降積る、雪氣の空も厭ひなく、姿を略す和田志津馬、敵の行衛知れざれば、空しく過る光陰の、矢竹に心、關所前、「コレ姉様、最前より此茶店で、待合す體の人は見へなんだか」袖「イエ、左様なお方は見受ませぬ」茶「然らば暫し」と腰打かけ、「姉様、此遠目鏡は往來の慰みか」袖「イエ、エ慰ではござりませぬ。わたしが父様は、此關の下役人、若切手なしに拔道を通る人が有ふかと、吟味の爲の遠目鏡」と、聞て志津馬が心の當惑、差當つたる切手の用意、ハテ如何がなと思案顔。お袖は一心志津馬が顔、テモよい男と思ひ初、云たい事も娘氣の口へ出兼る茶の花香、顔を眺めて汲手元、脇へ流すも氣もそごろ、茶碗計を手に持て、差出す心の思はくは、汲で知かし目遣ひも、相手に藝氣が有ばこそ。「是はきつい御馳走、余り茶に福が有、然らば今一つ。逆もの事にほんまの茶をいくつもく、呑たい」と、思はぬお茶の捨詞、袖「お前故なら何度でも、入花を上たい」と、何と云寄方もなく、顔は上氣

一森一茶の名一  
番にかく

袖一衣の袖と名  
にかく  
暮六つ一午後六  
時

呼かけられ云々  
一女より挑まれ  
て恥かしては  
よるしからず  
八ツ一午後二時

の初紅葉、男の潔粹一森に、戀の出花と見へにけり。志津馬も扱はと心付、我に心をか  
けしこそ幸、切手の手がより、と心で點頭きすり寄て、「コレお娘頼、たい事が有、何と  
聞てくれる氣か」と、思ふた壺へ和らかに、云かけられて返答の、詞に詰るが女子の情、何  
と返事の云様も、拙わたしもお前に頼が」志サどの様な事なりと、頼と有ば引はせぬ」  
袖「エ、忝い、わたしもお前故ならば、どの様なお頼でも、厭ひはせぬ」と寄添ば、志そ  
れ聞て落付た。何を申さふ我身の上、今夜中に此關を通らねば、我一命にかゝる事。こ  
なたの覺し拔道を、何卒教へて貰ひたい、死でも忘れぬコレ頼む」と、色で仕かける我身  
の大事、じつと締むれば締めかへし、恥しいやら嬉しいやら。抱付てはしめかはず、袖  
は人目の關の門、「暮六つからは通路ならず。それ迄に私が働き。若間違ばわたしがお供  
し立退ん、必氣遣ひ遊ばすな」と、思ひ合たる他生の縁、二人が望は二道の、一筋道を急  
ぎの道中、状箱刀に括り付、通りかよればお袖は呼留、「お飛脚様お休」と、いへば奴が  
立どまり、「呼かけられて姉様に、恥かよしてよいものか。まだ八つには間も有ばい、一  
ぶくせい」と腰打かけ、「ヤレくしんどやく」。申お客様、御免なされ」と、いへど志津  
馬も何氣なふ、「お飛脚はどれからお立」奴「イヤ下拙は、鎌倉扇が谷の四つ辻切通し、夜前



悪ちやリ一惡酒  
落  
ちやはく云々  
一ちやがくと  
冗談はいふまい  
私は眞實の事じ  
やを茶の詞にて  
續けたリ

濱松泊り、日が短くて漸爰迄」と、聞より志津馬は心當り、だまして問んと傍に寄、「扱々  
早い事。私共は何としてく。エ浦山しい足元」と、咄しを鹽に茶の出花、一目見るより  
餘念なく、お袖が傍にぐにやと成、奴「コリヤ忝い。白齒娘のお初穂、一口吞す氣はない  
か。一目見るから戀茶と成た」袖「エ、奴殿惡ちやり置んせ」奴「ちやはくとちやくく入  
まい。こちやすつどほんのこつちや。コレイノく、そつちや向まい、どうぢやくく」一蒸ア  
ア去とは貴公も顔に似合はぬやつし形。名は何と云ます」奴「身共が名は助平。イヤもう  
飯よりも好物だてや。コレサお娘どう仕てくれる」袖「エ、じやらくくと、そんな事より  
此様な、面白い物見る氣はないか」と、目鏡の傍へ突やられ、助平は差覗き、「ハアコリヤ  
面白い」と、眺め入、「テモ大勢人が見ゆる。ハア向ふに見へるはア、あれは、おらが仲間  
の頭だ。コレ頭、何ぞ用はないか。何じや金比羅様の挑灯も有、ハア川が見へる。何じ  
や藤屋の二階で客が樂しみよる。ヨヨ味い事く。ハアあの女は見た様な、それだそれ  
だ、ヤわりやおきのでないか」と、一目見るより佐相かへ、「ヤ儂はく、ようもおれに退  
状おこし、其處に樂しんで居るな。コリヤヤイ、云かはした事忘れはせまい。旦那へ願ふ  
て奉公引し、女房に持と思やこそ、春からも一步遣、三步やり四步遣、女房じやと思や

切米―扶持米を  
金錢にかへて渡  
す

登詰云々―奴の  
逆上にかけ糸は  
又風の縁

こそ、おらが切米打込で遣たぞよ。コリヤ其折、おらに何と云た、お前と夫婦に成て、夜も晝も、樂しもといふたじやないか。それに何だ、我見る前で尾籠千萬、其男と抱れて寐るか、よくもおらを欺したな。鎌倉で人も知つたる、澤井殿の家來澤井助平、もふ了簡が成ぬはい」と、駈け出せしが、「ハア、今のは何所だ。何だ、何にも見へない。コリヤどふだ」と、言ふにお袖がさし覗き、「アリヤ吉田の茶屋の二階、爰から一里も有所。腹立なさるだけが損、もふ了簡なされ」助如何様、いへば一理有。遠方から悟氣するは、響に耳とらするに同じ。とは云ながら残念」と、又差覗き現に成ば、是幸、扱は澤井の家來よな、と志津馬は邊に氣を付て、狀箱の封押切、一通奪取、元の如くに直すのも、知らぬ助平一心不亂、打眺め、「エ、アレ口中を契りをる。こりやもふ堪忍ならない」と、お袖が腰を力草、助エ、放して下さんせ」助何と是が放されう、ハ、く」と古木の如くしやちばり返り、横にどつさり朽木倒し、登詰たる奴風、糸目の切しごとくなり。傍に落たる紙入の、中より出る關所の切手、見るにお袖は飛立思ひ、嬉しいやら強いやら、結ぶの神の此切手、と志津馬に渡せば懷中し、吾我身の難義は遁れたが、かうして置れぬ奴殿。コリヤ虫腹か癪癪病か。コレ顔へ其水吹かけた」と、いふにお袖は狼狽て、沸返つた

水氣取れし云々  
河童の頭の皿  
に水なれば働  
けぬと同じく奴  
も切手を失ふて  
氣拔せり

昨日にかけお云  
云一飛鳥川昨日  
の淵も今日の淵  
となるの歌をと  
る

る茶釜の茶、天窓へざつふり打かくれば、悔り氣の付助平が、邊り見廻し起上り、さも苦しげに聲揮はし、「ア、どなた様か、忝い。生れ付て粉めが虫早く、時々おこる癩瘡子に湯がかよつて助つた」と、咄せば二人は顔見合せ、おかしさ隠す計なり。時も違へず關所には、打拍子木に助平が、一つ二つと指折て、「ム、フ、アリヤ七つの時がはり、大切の此狀箱、一時も早くお届申さん。關所の切手」と紙入の、内を捜せど、「ハテめんような。南無三寶跡の茶店で落したか。ドリヤ一走り」と立出れど、水氣取れし河童奴、ふならふならと池水の、泥埃に逢たるごとくにて、元來し道へ引返す。お袖は跡を見送りて、「此間に早ふ」と、茶店の道具を門内へ、運ぶ片手に顔眺め、見飽ぬ目鏡の戀男、志津馬は一心敵の手がかり、白齒娘が手を引、岡崎さして歸りける。鎌倉の奥女中、お里歸りの道中と、人目に見せる銚乗物、關所の前へ昇居る。家來お傍へ立寄り、「お關所で候へば、暫く是より御歩行」と、聞とひとしく戸を開き、旅姿に身を省し、兜頭巾に目計出し、昨日にかはる勢も、淵瀬と澤井股五郎、邊り見廻し、「コリヤ駕籠の者、太義で有た、是より早く歸てたもれ。林左殿は何してござるな」罵あれへ御出でござります。お旦那にはお先へお通りなされませ」殿、チ、木にも萱にも心置は、世話人の志、無足にせぬ我心

わいら一汝等

撫一撫斬  
さい先一幸と先  
にとかく

底。譬我を付狙へばとて、何程の事あらん、見付次第に返討。わいらもちつ共氣遣ひすな」と、家來引連れ打通る。此海道を住家とする蛇の目の眼八、人喰馬に櫻田が、手に入顔に先に立。櫻「コリヤ蛇の目、今咄した事、男と見込で頼むぞよ、何で有ふと見付次第に合點か」眼「エ、親方氣遣ひさあんな。此蛇の目が見入れたら、一寸も動かしやせぬ」櫻「ハテサテ氣味のよいやつ」と、紙入より取出し、金子千疋手に渡し、「當座の褒美納て置き」眼「エ、忝い、馬士に千疋とは、仕合よしの此蛇の目。何で有ふと見付たら、皆撫にする一鎧」と、祝ふさい先林左衛門、「晩の泊りで何かの事、謀し合さんサア来い」と、門内さして入相の、鐘諸共に關の門、門はつしとしむる音、宙をかけつて政右衛門、關所の前に立寄ば、門戸かためて出入もならず。致「暮時でわからねど、うしろ姿は林左衛門に違ひなし。スリヤ股五郎を同道には極つた。エ、付込だ敵を取逃せしか口惜や」と、齒嚙をなして身を悶へ、門内を白眼付、無念涙にくれ居たる。「チ、それよ、志津馬と爰で出合約束、但し先へ入込だか。何にもせよ、出合所は一筋道。今夜中に此關越ねば、最早敵は手に入ぬ」と、行つ戻りつ思案を極め、兼て聞居る拔道は、慥に竹の林の中、押分行ば山傳ひ、探り廻りし眞暗がり、うろく眼に助平が、是も窺ふ拔道を、すかし見れば

雲突く様な大男、恠り驚き身を忍ぶ。探り當りし政右衛門、竹藪押分忍び行。とつくと見届け助平が、狀箱腰にくより付、「味いく」と拔道の、跡を慕ふて急ぎ行。不敵なるかな政右衛門、天に一命投打つて、目ざすもしらぬ眞の闇、降來る雪の道踏分、裏道づたひ壹丁計、行よと見へしが、關所の内に聲高く、「忍びの鳴子の音するは、裏道を越る曲者有」と呼はれば、「それ遁すな」と捕人の人數、兼て用意の高挑灯、人數を配つて取巻しは、危かりける。三重次第なり。政右衛門は事共せず、三角に眼を見開き、「山を食する猿松め、皮引ばいでくれんず」と、大刀引ぬき待かけたり。「それ遁すな」と組子共、一度にかかる四方詰、政イヤ小癩な」と振ほどき、付入所を宙にて切取、飛くる熊手を受流し、切立々々切立れば、詞には似ぬ組子供、跡をも見ずして逃ちつたり。逃るを追す政右衛門、「道の案内は此挑灯」と、勝手覺へし杣道の、足跡しるべにしたい行。跡におくれて助平は、道の勝手は方角知らず、うろつく折柄、取て返す組子共、「それ」といふにも及ばよこそ、高手小手にくより付、狼狽奴と夢にも知らず、組子の頭、大音上、「強敵の曲者を、組子仲間へ捕捕たり」と、引立てこそ、三重急ぎ行。

# 第八 岡崎の段

苦は色かゆる一  
 謠にて苦は何處  
 に行きても免れ  
 ぬ  
 心を奥口―心を  
 奥(清慮)にかく  
 三河の澤云々―  
 三河の八橋の事  
 を歌にとる杜若  
 に書く八橋に八  
 ツをかく  
 じやちくち―冗  
 談話し

雪の段―諸曲鉢  
 の木に佐野が時  
 頼に鉢の木を焚  
 いて馳走したる  
 をとる

世の中の、苦は色かゆる松風の、音も淋しき冬空や、霰交りに降積る、軒もまばらの放  
 れ家へ、岡崎の宿はづれ、百姓ながら一理屈、主は山田幸兵衛と、人も心を奥口の、障  
 子隔て女房が、績車の夜職歌、歌いとし殿御を、三河の澤よ、戀の棧文杜若、更て忍  
 ばよ、夜は八つ橋の、水も洩さぬお手枕、鄙も都も小娘の、誰教へねど戀草を、見初惚  
 初打付に、雪の夜道の氣散じは、互に手先折添る、傘の志津馬に纏れ合ふ、じやらくら  
 咄しいつの間に、戻るお袖が我家の戸口、「チ、辛氣、いつもは遠ふ覺へたに、意地悪ふ  
 今夜の早さ、まだ咄しが残つて有、跡へ戻て下さんせぬか」志、去迎は譯もない、日は暮  
 る草臥足、跡へも前へも雪の段、鉢の木の燒火より、暖なそもじの肌で、暖めて貰ふが  
 御馳走。早ふお宿を御無心」と、ちやれた詞にどふいふて、よいか悪いか白齒の娘、聲聞  
 付て、母誰じやく〜」袖アイく〜母様わたしじやはいな」母「チ、お袖とした事が、此寒  
 いのに何して居やる。戻りが遅さに待兼た、早ふ這入や」と母親の、詞を鹽に内へ入、  
 「疾ふ歸らふと思ふたけれど、道連のお方が有て、それで思はず夜に入りました」母「ム、

道連のお方とは「拙」アイ行暮した旅のお方、それはくきつい御難義、今宵一夜は此方の内に、留て上て下さんせ」母「申苦しうござりませぬ。此方へお這入遊ばせ」と、呼れて志津馬は怯々と、小腰屈めて、「御赦されませ。獨旅の浪人者、日は暮れる、足は損ふ、詮方盡て此お頼、近頃わりない事ながら、一夜のお宿を御無心」と、いふも心に荷物の葛籠、お袖見るより、「申、母様、父様の旅葛籠、彼處に戻つて有からは」母「チ、親仁殿も今日暮前歸らしやつた。旅草臥で寢てじやはいの」お「エ、遅ふても大事ないに、早い事や」と其跡は、云ぬ色目を見て取母、一日頃から二親がちよつと出ても、戻りを案じる孝行なそなた、どふやら不興な顔持は、かたい爺御の氣質故、折角お宿を借ませふと、お供仕やつた道連様へ、約束が違ふかと案じ過ての事有ふ。警、爺御は得心でも、此母が不得心。何故といや、今でこそ茶店の娘、去年迄は鎌倉のお屋敷方へ、娼、奉公、御主人様のお差圖で、さる武家方へ末々は縁に付ふと堅い約束、其云、號の夫を嫌ひ、無理隙貰ふて、親の内へ戻つて、間も無ふみだらが有ては、以前のお主計、じやない、顔は知らねど約束仕た聲殿へ、どの顔さけて云譯せふ。サア斯いふはいふ物の其方に限り、そふした事は有まいけれど、時分の來た若い娘の有内へ若い男、一夜は愚半時でも、ひとつ所に寢

四ツ一四ツにす  
もと午後十時  
當言一あてこそす  
り  
あどない一あど  
けない

臥せば、戸は立られぬ人の口。其上連合幸兵衛殿、國守よりのお目かねにて、新關の下  
 役を勤さつしやる今の身分、常の百姓とは違ふて、物事を正しうするも役柄故、必  
 悪ふ聞やんなや」と、いはれて何と返事さへ、お袖が異見の相伴に、志津馬も手持投  
 首を、見る氣の毒さ母親も、さのみは如何と何氣なふ、母「此様に異見するも、轉ばぬ  
 先の杖とやら。イヤ申御浪人様、お心にさへられて下さりますな。泊ます事はならず  
 とも、せめてお茶なと入花を、一つ上ふ」と尻輕に、勝手へ行間待兼て、娘はおづく  
 志津馬が傍、「誰も來ぬ間に云残した、咄しの残りを納戸で」と、取手をすけなく振放  
 し、志「見る影もない旅の者に、關所での情といひ、道すがらあた嬉しい、詞を誠と思  
 ひの外、云號が有からは、主有花に落花狼藉、密夫なぞと重て置て、モウ四つに間も  
 有まい、夜の更ぬ中宿取て、寐て花やろ」と立上る、袂に緋り、袖コレ申、有て過たる  
 緣定め、今更とやかう母様の、今の詞がお心にさはつて、私へ當言を、無理とはさらさ  
 ら思はねど、恥かしながら今日迄も、殿御に惚たといふ事は、知らぬあどない不束な、  
 在所育の此身でも、結ぶの神の御利生で、お顔見るから思ひ初、どふぞ女夫に成たいと、  
 胸はしがらむ白川の、關は越てもこへかぬる、戀の峠の新枕、かはさぬ中に胴欲な、つ



しども涙しどもなきにかく

毛虫—いやがるくものをいふ

れない事をいふ手間で、つい可愛と一口に、云れぬかいな」とすがり寄、しども涙のか  
こち言、岩木ならねば遠にも、振捨がたき戀の蹄。かよる折から門口へ、いきせき來か  
かる蛇の目の眼八。お袖は目早く一間の内、無理に志津馬を忍ばせて、何氣ない顔。入  
口から差視いて、黒ヤ味いぞく。毛虫の親仁や母者は居ず、お娘一人は無い圖な首尾  
と、這入や否や後から、帯際ほふと引だかへ、「常から目顔で知らしても、びんしやんび  
んしやん驛廻る、馬よりおれが太鼓のぶち、立場で驛驛見付た様に、さんばい仕兼て居  
るはいの。否應なしにちよこくと、孳でおくれ」としなだるれば、袖エ、穢ない、うる  
さい、嫌らしい」と、突付られても押強く、黒誰でも初手はいやくくと口では云が、がさ汁  
と巴事は、味覺へてから止られる物じやないて。それ共否ならおれも意地じや。今夜藤  
川の關所を破つて、忍び道を通つた奴、召捕よふと岡崎中は、上を下へと詮義のどう中、  
胡蓋なやつとの相合傘、ちらりとつないだ此眼八、灰汁で洗ふた蛇の目が詮義、ほへ頬  
かよしてこまそふ」と、かけ入向ふへ立ふさがる、お袖を突退立切し、障子引明見て悔り、  
「こりや違ふた」と狼狼眼、かけ出す蛇の目が利腕捻上、立出る主の幸兵衛、「百姓なれ  
ど新關の下役をも相勤る、身共が居間へ、泥脚を切込狼藉やつ。了簡ならぬ所なれど、

うつばれー現抜  
かす

へらア口ー負け  
ザ口

所存有故赦してくれる。此以後きつと嗜おらふ」と、投付らるよと思ひの外、突放したる手強さに、底氣味悪くうぢくもぢく。見るにお袖が嬉しさと、いとしい人の納りを、心一つにとやかくと、案じ彌増す思ひなり。弱みを見せぬ悪者根性、お家へべつたり上股打、「役日々々と云はるよが、其大切な關所をぬけた、科人を吟味する最中に、爰の娘が連て戻た旅の侍、引込で置ながら、詮義する此眼八、何故しめ上て手ごめにしたのじや」幸ム、娘が連立歸つたとは、其侍は何處に居る「黒ヤア慥さつきに爰の内へ」幸黙りおらふ。お袖にうつほれ最前より法外の有條、承引せぬ故無法の當推。よし又其侍とやら、此内へ来たにもせよさ、鎌倉通行の東海道、數限りなき旅人の往來、是ぞと云べき證據もなく、侍とさへ云ば、悉引捕へ、關破りと云べきか。勿論儂は當所の馬追、誰赦しての詮義呼はり、長居ひろがば括し上、御地頭へ引立ふか。何とく」ときめ付られ、黒ア、申々お氣の短い。商賣が馬方だけ、豆から發つたいざござで、親仁様の寐所迄、踏馬御免」とへらず口、跡をも見ずして逆歸れば、跡見送りて落付娘。忍ぶ志津馬も一間を立出、「覺なき身に關破りと、今の危難を免れしは、御亭主の御厚志故、忝し」と手をつかへ、禮の詞に、幸「やははく痛入。先々お手を上られい、サ、平にく」承

れば御浪人とな。定て仕官のお望で、上方へござるのかい」志「イヤ〜様子有て世を忍ぶ獨旅、則當所岡崎にて、山田幸兵衛殿方へ密に參る浪人者」と、聞て不審の眉に皺な。拙者は鎌倉の昵近武士、澤井城五郎殿に縁有者、委細は是に」と藤川にて、手に入一通手に渡せば、封押切て老眼に、つぶ〜讀も口の内、様子知らねば氣遣ふお袖。幸兵衛とく〜讀終り、「ム、某が性根を見込、和田行家を討て立退、澤井股五郎が力と成てくれよと有、お頼の書面の趣、先達て鎌倉の様子承はりし砌より、待に待たる此お頼慥に承知仕た。遠途の所御太義々々々。此使を勤らるよ其元は、城五郎殿の御家來か」と、尋る詞は敵の手筋、是幸と氣色を正し、「ハア幸兵衛殿の御懇切、承はる上からは何をかくさん、某こそ刀の遺恨止事を得ず、和田行家を手にかかけし、澤井股五郎と申者」幸「さア御自分が股五郎殿か」志「いかにも左様。鎌倉出立致せし折は、澤井殿より附人も數多有共、人目立も如何と存じ、別れ〜に罷登る。城五郎殿には、前以て御懇意の幸兵衛殿、何とぞ御助力下さらば、此上もなき拙者が悦び」幸「ム、さすれば貴殿が股五郎殿か。是は〜存寄ぬ、是迄互に御意得ねば、双方共に知ぬ同士。コリヤ〜娘

云號いひなづけの聲殿しここのぢやはやい」拙あつエ、そんなら私わたしが鎌倉かまくらへ御奉公ごほうこうの其中うちに「幸さい」ヲ、サ城五郎殿じやうごろうどののお勸故すゝめ、其方そのあたを遣つかはさふと、面談めんだんには及およばねど、約束やくそく致いたした花聲殿はなしここの。能よふこそ尋たずねて下くだされた」と、悦よろこぶ聲こゑの洩聞もれきこへ、母ははも立出たちいで、「ヤレ〜〜」思おもひがけない、此方こなた様が聲殿しここので有あつたかいのふ。したしが氣きには支さへて下くだされな、云號いひなづけは有ありながら、股五郎またごろうと云名いふなを嫌きらふて、今迄いま娘むすめが不得心ふざくしん、それ故ゆゑ疎遠そゑんに打過うちあせました。ガ聞きたと違ちがふてヲ、よい男をとこ。此様むじこのな聲殿しここのでも、其方そなたはやつぱり否いやかいのふ」拙あつヲ、勿體もつたいない事い云いはしやんす。云號いひなづけの殿御どのごじやと、今の今迄いま知しらいでさへ、添そひたふてならぬ物もの、縁えんは切きつてもお主しゆうの差圖さしづ、父様ちちさまや母様ははさまのお赦ゆるしの出でた股五郎またごろう様さま、わたしが何なにの嫌きらひましよ。二世にせも三世さんせも替かはらぬ夫をつと、もふ〜是こゝから何方どこへも、やります事ことじやござんせぬ。いつ迄いつまで爰こゝに居ゐて、可愛かほがつて下くださんせ」と、心こゝろに思おもふ有ありたけは、云いで思おもひを押包おしづひ、お袖そでが嬉うれしさ二親ごもも、俱ともにほたく悦よろこび顔がほ。思おもひがけなき云號いひなづけの、噂うはさし志津馬しづまは、「成程なるほど々々、上杉うへさぎに仕官しきわんの中うち、城五郎殿じやうごろうどのお差圖さしづにて、顔かほはしらねど云號いひなづけのお袖殿そでどので有あつたよな。一方ひきかたならぬ股五郎またごろうが一世いつせの大事だいじに及およぶ時節ときふし、御圍おかくまひ下くださらば、生々しやうとせ世々せせの御厚恩ごこうおん」と、わざと其身みをへり謙くだり、詞ことばを盡つくし頼たのむにぞ、幸さいイヤエ、何が扱さてく、狩人かりうどすら懷ふせに逃入にひい鳥とりを助たするならひ、まして聲殿しここの違ちがひはない。年としこそ寄よつたれ



左右なく一むや  
みに

死活のいけ一柔  
道に活を入れる  
事あるをいふ

し、苦もなく首筋一掴み、一振ふつて右左、弱腰蹴すへて狗投。透間を得たりと二番手  
が、腕からみを振ほどき、ほぐれを取て眞逆様、頭轉胴骨雪道に、打付けられて叶はじと、  
入替つたる三番手、打込十手かいくどり、脾腹を丁ど眞の當、勵しき手練にさしもの組  
子、左右なくも寄付す、跡じさりする計なり。見兼てかけ寄捕手の小頭、「ヤア上意によ  
つて向ひし我々、手向ひなすは關破りの浪人者に相違はない。腕を廻せ」と詰かくれば、  
取「ヤレ麓忽なりお役人、急用有て此ごとく、夜道を急ぐ旅の者、丸腰の某を、關所を破  
りし浪人とは、身に取て覺へぬ難題。外を御詮義なされよ」と、ちつ共恐れぬ丈夫の振舞。  
始終を見届幸兵衛は、戸口をかけ出押隔、「憚りながらお役人へ申上る、關破りの御詮義  
半、深夜に一人歩行の族人、御疑ひは御尤。併此者は鎌倉飛脚、子細有て此幸兵衛、能  
く存じ罷有ば、慮外の段は御用捨有、無難にお通し下さらば、有がたき仕合」と、かばふ詞  
に政右衛門、「ムウさいふ此方は何人」と、いふを打消、「イヤサコリヤ身に覺へないにもせ  
よ、お役人に慮外の手向ひ。ア、不届至極」と呵り付、しづくくと歩み寄、倒れ伏たる  
組子共、引起して死活のいけ、「いづれもお心慥にござるか、お役目御苦勞千萬」と、苦い  
挨拶氣の付く捕人。幸兵衛猶も威儀を正し、「承はれば關所を破りし料人は、帶刀の浪人

昨今なれど一俄  
のち近付

心憎し一奥床し  
ためつすがめつ  
一縦からも横か  
ちも見ろ

者、彼は町人此丸腰、憚りながら人違へ。斯やうな義に隙取中、彼曲者を取逃さば詮なき事。早々お手當なされよ」と、云れて實もと捕人の小頭、「ムウ其方が存ぜしと申詞に相違も有まい。是よりは山手へかより、彼曲者を詮義せん。家來參れ」と引連て、元來し道へ引返す。影見送つて政右衛門、「ハ、ア危ふき場所を遁れしも、至貴公の御厚志故。ガお禮は重ねて。心もせけば失禮ながらお暇申」と立上るを、「暫し」と止め、「昨今なれど折入て、お尋ね申子細もあれば、見苦しけれど拙者が宅へ、暫時ながら」と老人の、詞に是非なく政右衛門、「然らば御免」と打通れば、門の戸引立主の幸兵衛、傍近く差寄て、「多勢を相人に今の働き、感心の余り役人を欺歸し、難義を救ふは身共が寸志。それに付ても不審きは貴殿の柔術。正しく拙者が流義に同じき眞影の極意、手練せられし旅人は」と、訝かる色目此方も不審、政「眞影流の極意なりと見極られし御老人。ハテ心憎し」と双方が、ためつすがめつ見合す顔。政「ム、お別れ申て十年余り、相好は替られしが、生國勢州山田にて、武術の御指南下されし、要様ではござりませぬか」幸「チ、其詞で思ひ出した。我勢弱に有し節、幼少より育上し庄太郎で有ふがな」政「成程々々、然らばあなたか」幸「其方が」是はくくと手を打て、盡ぬ師弟の遠躬行燈、搔立く打眺め、幸「チ

稚顔に見覺有、庄太郎に相違ない。ハテ健に生立しな「政」ハア先生にも御堅勝で「幸」チ  
 ナサく、無事の對面互に満足。さりながら、ア、思ひ廻せば過行月日。其方は山田の  
 神職荒木田宮内が駈なれ共、幼少の砌父母に離れ、孤となる不便さに、手鹽にかけて育  
 つる所、稚立より武藝を好むは、未頼もしく思ふより、門弟共へ稽古の次手、一手二手  
 と教ゆる中、一を聞て十を知、頓智といひ器用といひ、十五以下にて鎗術、劔術、鎖  
 鎌、體術柔に至る迄、諸歴々の弟子を追拔、眞影の奥義を極むる無双の達人、何卒大  
 家へ仕官致させ、親の氏をも繼せんと、心頼みに思ふ中、未熟の師匠と見限りしか、家  
 出致して十五年、便なければ折に觸れ、此庄太郎は如何なりし、と雨につけ風につけ、思  
 ひ出さぬ事もなく、夫婦打寄其方が噂、シテ只今の住所は何國、有付とてもあらざるか」  
 と、師匠の慈愛に政右衛門、思はずはつと手をつかへ、「親にも勝る大恩の、師匠を見限  
 り家出せしと、御疑ひは去事なれど、常々武術の御講釋、小耳に覺ゆる其中に、一派に  
 心を凝さんより、諸流に渡り修行をなすこそ、此道の心がけと御教訓、心魂にしみ渡り、  
 十五歳にて國を出、普く諸國を遍歴し、武術を磨く武者修行、天運に叶ひ然るべき主取  
 も致せしかど、生れ付たる好色者、亂酒に主人の機嫌を損じ、只今は元の浪人、便るべ



き方もなければ、若上方に有付もやと、心ざして參る所、思ひがけなく先生に、面目もなき對面」と、うかつにそれと身の上を、云ぬ底意は白髮の母、様子聞いてや一間を立出、「チ庄太郎か、テモ成人仕やつたの。連合の眼鏡に違はぬ武藝の上達。器量を見込で頼た子細が有」と聲をひそめ、「そなたの家出した時は、三つ子のアノお袖、もふ十七に成はいの、縁有て云號の其婚殿を、親の敵と付ねらふ者が有故、まさかの時の後楯、力に成て下さらば、餘の人千人萬人にも、勝つて嬉しう思ひます」幸「チ、いかにもく。庄太郎と知ぬ先、難義を見兼救ひしも、其義を頼まん下心」と、師匠の詞、聞もあへず、政右衛門拵寄て、「ムウ其付狙ふ敵の假名は」幸「チ、掣といふは上杉の家來澤井股五郎といふ侍、付狙ふは和田志津馬と聞た計、面體は知ね共、高で知たる若輩者、幸兵衛が片腕にも足ぬ相人。ガ爰に一つの難義といふは、彼奴が姉婚、唐木政右衛門といふ奴、音に聞へし武術の達人、譬五十人百人加勢有とて、政右衛門には及ばぬく。まだしも唐木に立合んは、其方ならで外にはない、何とぞ掣に力を添、助太刀頼む庄太郎」と、餘義なき頼に政右衛門、「先生に内縁有股五郎殿に力を添れば、少しは帥恩を報ずる理り、いかにも助太刀仕らふ。サ、此上は澤井殿の隠れ家へ御案内」と、せき立唐木忍びの眼八、蓋

歩行―あるに  
かく歩行は村の使  
あるきするもの  
大太刀―原本大  
たらとあり

海老鏡―海老型  
の鏡、屈むの縁  
解やちぬ―意を  
解せぬと雪の縁  
五調作―健な膝  
格  
御上根―根機  
の上き事

服部―攝津の煙  
草の産地

押明て差覗く、影をちらりと見付る幸兵衛。心付ねば、母「ヤレく嬉しや、庄太郎の今の詞聞たからは千人力、ドレ鞆殿へ」と立上るを、幸「ハテ扱いらざる女の差出。股五郎殿の行衛は知らぬ。ナハテ壁に耳有世の諺、それと慥に知ね共、云聞すには折が有ふが、うかつにそれと明されぬ、咄しの蓋は取ぬが祕密」と、何處やら一物歩行の小助、門の戸叩て、「申々、庄屋殿から急な御用、只今御出」とんきよ聲、幸「ハア又關破りの詮義で有ふ。いやといはれぬ役目の不祥」と、云つゝ羽織引かけて、たしなむ大太刀差こなす、腰もかぐみし海老鏡を、葛籠にしつかと、「コリヤ女房、今も云た咄の蓋、戻つて來る迄明ぬ様、心におろした此鏡前。ナ合點か」と詞の謎、聞女房も解やらぬ、雪道いとはぬ高足駄、さす傘の骨組も、人に勝れし五調作り、歩行を先に幸兵衛は、心を残して出て行。母「戻らしやる迄寐られもせまい、糸績ながら咄ませう」政「ハア今に御上根な事。マア火にお當りなされませ。私も是から下男同然に、お遣ひなされて下さりませ」母「何のいの。此方様は大事のお客。マア煙草香でゆるりつと、寐轉んだがよいはいの」政「イエく、勿體ない師匠の内。ホンニ此煙草は何處から參つた」母「ソリヤ親父殿が旅戻りに、貰てござつた上方煙草」政「ハアあなたのお口に合のなら、服部か國分か、此天氣に斯し

郡山一水にかく

いんのこ一子供  
をすかす唄にて  
犬の子の略

爪はづれ云々一  
身のこなし

て置いたら濕りましよ。留守事に刻て見ませう、幸爰に切臺庖丁」底に鋸の葉拵へ、敵を聞出す煙草の小口、葉巻手早くきりきりと、大の體を小廻りの、奉公振も哀れなり。外は音せて降雪に、むざんや肌も郡山の國に残りし女房の、思ひの種の生れ子を、抱てはるく、海山を、たどりくつて岡崎の、宿より先に日は暮て、何國を宿と定なく、がはと轉ればわつと泣、子をすかす手も冷氷る、雪の蒲團に添乳の枕、いんのこくくくりに、友誘ふ犬の聲々、夜廻りの番が見付る小挑灯、「ヤイく、軒下に何で寐るのぢや。きりく往け」と呵られて、釜、ハイくくく、私は秩父坂東廻る順禮、積でお中を痛めまする、ちつとの間置しやつて」番人順禮でも幽靈でも、在の中に寐さす事はならぬく。意地ばるは猶胡蓋者、棒いたどくな」と挑灯突付、見る爪はづれの尋常さ、白眼んだ眼うつかりと、細目に明る戸の透間、内から覗く夫婦の縁、思ひがけなき女房お谷、ハツと恠り差合せ、包む我名の懸れ口、悪い所へ切かけた、煙草の刃金、胸を刻むと人知らず、番人「フウ見た所が小盗する風俗共見へぬ。此雪に乳香子かよへて難義じや有。何所ぞ後生氣な所を頼んで、泊て貰はしやれ。エ、見れば見る程比合なゑい女房、一人寐さすは残念なれど、此方も寒氣にとぢられ、瘦畑の鬼灯で、あつたら物を見遁す事」と、謔

き歸るも頼みなき、人の詞もせめての頼、火影を力、戸口に這寄、谷、幼い者を連た順禮  
 でござります。お情に今宵一夜さ、お庭の端に」と計にて、積に苦しむ息切の、聲に主  
 は涙もろく、「いとしや積持そふな。門中に寐てはたまるまい、泊てしんじよ」と立て行。  
 南無三寶と裾引留、政ア、是は又御龜相千萬。此お觸の嚴しい中、殊にお役柄の此内、  
 何處の者やら知もせぬに、滅多に引入、跡の難はどふなさるよ。急度止しになされませ。  
 夜中に一人歩、女子、碌な者じやござりませぬ。戸を明すと、ほい逝したがよござりま  
 す」母「いか様のふ、親仁殿の留主の中は用心が肝心。コレく旅人、いとしけれど一人  
 旅を泊るは御法度。御城下の中は軒下にも寐る事はならぬ程に、宿はづれの森の中へ往  
 て寐やしやれ」と、和らかに云て引出す糸車、歌來いと云たとて行れる道か、道は四十五  
 里波の上。谷ハア何處へ行ても一人旅は泊てくれふ様もなし。はるくの海山も、此子  
 の顔を旦那殿に、見せたいと思ふ精力で、産落すから此巳之助、漸忌も明や明ず、國  
 を立てついに一夜さ、家の下で寐た事がなけりや、身はならわしと山寺の、鐘かなれば  
 寐る事にして、星の光りを燈火と、思ふて寐入ど今夜のくらさ、氷の様な此肌で、寐苦  
 しいは道理じやはいの。殊更積で乳は張らず、雪に寒、雨にうたるよ、つらさは骨にこた

身はならわし  
 人の身もならは  
 しいものをあはず  
 していざ試みん  
 戀やしぬると  
 (古今集)

どみーかすむ  
いぢらしーかは  
いや  
とつかはー急忙

ゆれ共、旦那殿や弟が、敵を尋る辛抱は、まだくくこんな事では有まいに、其艱難にくらべては、雪は愚剣の上にも、寐るのがせめて女房の役。氣は張詰ても此積の、重るに付ては二人の身に、勞れの病が起りはせぬか。萬一悲しい便やなど、聞たら何とせふぞいのふ。頼上るは觀音様、弟夫の武運長久、我子の命、息災延命、未練な事じやが私も、此子を夫に渡す迄は、生て居たい死ともない」と、傍に夫の有ぞとも、知らぬ不便さ喰しぼる、喉に熱湯内外に、水火の責苦雪霰、子を濡さじと抱しめく、天道哀れ白雪の、積り重なる旅勞、積と寒氣にとぢられて、アツと一聲氣を失ひ、どうど倒れし物音は、肝にこたへて「南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」も口の内。「今のは何ぞ」と主の母戸を引明ればばつたりと、身は濡鷲の目はどみたり。母「こりや眩暈が來たのじやはいの。エ、いぢらしや、如何せうぞ。夫よ幸此氣付」と、とつかは文庫に用意の藥、敢「ア、申そりや御無用になされませ」母「なぜにいの。こりや親仁殿の道中で持しやつた結構な氣付」母「サア其結構な氣付を、非人同然の者に呑して、それでも氣の付ぬ時は、かより合に成ますぞへ。此儘にして放り出して、お仕舞なされませ」母「じやといふて、どふ見捨に成物。アレ可愛や、乳を拭して泣わいの。せめて此子を殺さぬ様に、奥の火燵で温て

風に當じ云々  
子供を火燵に入  
れて風に當らぬ  
やうにする  
いひ柴一飯をた  
く料の新

けぶらいでも  
うすくにても

暗き夜くま  
すにかく

遣ませう」風に當じと寐巻の繻絆、あかの他人は慈悲深く、比翼とかはす女房を、慘ふ  
引出し戸を引立、奥口見廻しさし足し、勝手は見置釜の前、附木の明り見答て、人は何  
とかいひ柴を、そつと隠して門の口、伏たる妻に氣を付る、柴の焚火の燐り、嚙しめ  
る齒を割割て、雪に潤す氣付の一滴、耳に口寄聲かすめ「お谷」といふも憚りて心の内で呼  
生る、夫の誠通じてや、「うん」と一聲、氣が付たか、コリヤ女房「谷」ハア、マアく  
政右衛門殿かいの」と、いふを押へて、政「コリヤ何にもいふな。敵の有家手がかりに取  
付たぞ。此屋の内へ身共が本名、けぶらいでも知されぬ大事の所、其方が居ては大望の  
妨、苦しく共こたへて、一丁南の辻堂迄、這ふてなり共行てくれい。吉左右を知す迄、  
氣をしつかりと張詰て、必死るな。サア早ふ行く」と、夫の詞は千人力、谷「觀音様の  
お引合せ。お前に逢たは人參熊臈。エ、忝い」。坊は何處へ「政氣遣ひすな、坊  
主は奥で寐さして置た。ソレく向うへ來る挑燈、見付られな。早ふく」とせり立れ  
ど、此年月の悲しさと、嬉しさこふじて足立す、杖を力に立兼る、兎やせん側に脱捨し、  
薦に積りし雪の儘、著せて人口を暗き夜を、ほかく戻る達者親仁。政「チ、お歸りなさ  
れましたか」幸チ、庄太郎、寒いに門に何して居る」政「イヤお歸りが遅い故、お迎ひに

出かける所」幸、ナンノ迎ひには及ばぬ。こりや門口に柴の燃さし、非人共が業で有、不用心な」と、見廻す挑燈、政「イヤ私が」と取拍子、態とぼつたり、「コリヤ釐相」幸だんなないく。きつい風で、すでに道で取られふと仕た。まだも忍い所で火が消た」と、いふもこたへる疵持足、天氣も大方上り口、庭から足拭く下駄直す、師匠思ひに機嫌顔、幸「イヤ馴染程結構な物はない。是から緩りと夜と共咄そふ。彌、最前頼んだ事、違變はないの」「是はお師匠共覺へぬくどいお尋、心元なふ思し召なら、鈍刀でない、魂を、只今金打」幸「ア、コレ何のそれに及ぶ事」政「及ばぬとおつしやつても、お頼なざるよ本人の股五郎殿の有家、御存じないとおつしやるは、お師匠の詞に鞘が有かと存じられ、頼まれるに力がない。ナント左様じやござりませぬか」と、探る心の奥より女房、稚子抱走り出、「コレ親仁殿、最前行倒れの順禮が、抱て居た此乳香子、今肌を明て見れば、守りの中に此書付、和彥郡山唐木政右衛門子巳之助と、書て有わいの」「ヤア」と幸兵衛立寄て「誠にく。シヤア好い物が手に入たぞ。敵の粉を人質に取て置ば、此方に六分の強み、敵に八分の弱み有。股五郎殿の運の強さ。其がき随分大事にかけ、乳母を取て育てが、計略の奥の手」と、悦勇めば政右衛門、すつと寄て稚子引寄、喉笛貫く小柄の切先。

幸兵衛驚き、「コリヤ庄太郎、大事の人質何故殺した」政「ハ、ハ、ハ、此駒を留置、敵の鋒先を挫かふと思し召先生の御思案、お年の加減か、こりやちと擦が戻りました。武士と武士との曠業に、人質取て勝負する比怯者と、のちく迄人の嘲り笑ひ種、少分ながら股五郎殿の、お力に成此庄太郎、人質を便りには仕らぬ。目指す相手政右衛門とやら云奴、其片われの此小駒、血祭に差殺したが頼まれた拙者が金打」と、死骸を庭へ投捨たり。幸兵衛手を打、「ハ、ア尤。其丈夫な魂を見届たれば、何をか隠そふ、股五郎は奥へ来て居るはいの。祖母舞殿を起しておじや。コレく股五郎の片腕に成、頼しい人が来たと、いふて爰へ呼でおじや」政「スリヤ澤井股五郎殿は此内に居さつしやるか。フウシテ外に連の衆でもござるかな」幸「イヤく、供もなしたつた一人。奥底なふ咄してたも」と、打明語るは思ふつほ、何條知たる股五郎、手取にするは安かりなん、と手ぐすね引て待大膽。志津馬は女房が案内に、股五郎が片腕とは、何奴なり共只一討、と鯉口くつろけ居合腰、氣配り目配り、互にきつと、二人「ヤア、こなたはく」と一度の仰天。幸兵衛むんすと居直り「唐木政右衛門、和田志津馬、不思議の對面満足で有ふな」と、先がけられし二人より、思ひがけなき女房が、心どぎまぎ不審顔、幸「ナント老人の目利、

居合腰―相手に  
仕懸るさま



返つて却て

三寸組板一服調  
の明かなるをい  
ふ

よもや違ひはせまいがの。今宵澤井股五郎と名乗來る年配格好、聞及びしとは拔群の相違。扱は返つて付狙ふ志津馬か、但し余類の者か。肌赦させて詮義せんと、態と一ぱい喰た顔、三寸組板見ぬいたれど、我弟子の庄太郎が、政右衛門といふ事を、知たは漸たつた今。骨柄といひ手練といひ、適股五郎が片腕にせん物と、頼めば早速承知仕ながら、股五郎が有家を根を押して、聞たがるは心得ずと思ひしが、子を一剋りに差殺し、立派に云放した目の中に、一滴浮む涙の色は、隠しても隠されぬ肉身の恩愛に、始てそれと悟りしぞよ。澤井にさせる恩はなけれど、娘お袖を城五郎方へ奉公に遣た時、筋日有人の娘、末々は我一家の股五郎と娶合せん、ヲ、いかにもお頼申と、つい云た一言が、今更引れぬ因果の縁。その後娘は奉公引て歸りしかど、今落日に成た股五郎、見放されぬは侍の義理、かくまふ幸兵衛、ねらふは我弟子。悪人に組してくれと頼に引れず、現在我子を一思ひに殺したは、劔術無双の政右衛門、手ほどきの此師匠への云譯、去としては過分なぞや。其志に感じ入、敵の肩持片意地も、最早是切、只の百姓。町人も侍も、替らぬ物は子の可愛さ。こなたは男のあきらめも有、最前ちらりと思ひ合す、順禮の母親の心が察しやらるよ」と、悔めば門に堪へ兼て、わつと泣聲内よりも、明る

あへ亡骸―あへ  
なきなきがら  
てうち―子供の  
手を拍つ戯

戸直に轉び入、あへ亡骸を抱き上、谷「コレ巳之助、物云てたも、母じやはいのく。夕  
部迄も今朝迄も、憂い辛い其中にも、てうち仕たり藝づくし、爺御によふ似た顔見せて、  
自慢せふと楽しんだ物、逢と其儘差殺す、慘たらしい父様を、恨むるにも恨られぬ。前  
生にどんな罪をして、侍の子には生れしぞ。こんな事なら先刻の時、母が死したら憂目は  
見まい。佛のお慈悲の有ならば、今一度生返り、乳房を吸てくれよかし」と、庭に轉び  
つ這廻り、抱しめたる我が身も、雪と消へき風情なり。志津馬涙拭ひ、「此上は包ん様  
なし。逆もの事に眞實の、敵の有所を」幸「何が扱此方も隠しはせぬ。有様は此幸兵衛、  
最前庄屋へ呼れた時、股五郎に逢て来た」志「ヤアすりや敵は庄屋の方に。心得たり」と駈  
け出すを、政右衛門引とどめ、「愚々。我々爰に有と聞て、暫時も此地に足を留ふ様がな  
い。はや五六里も行過て、もふ爰等に敵は居ぬ。此行先も用心して、海道筋へはよも行  
まい。道をかへて落たと見へる。親仁様、何と左様でござらうがな」幸「したり黒星其通  
り。逆も非道の股五郎、天道の御罰にて、どうで討るよ者なれ共、此岡崎で勝負さすれ  
ば、肩持ねばならぬ幸兵衛。薬師堂の山越に、中仙道へ落したは、城五郎へ一旦の情、  
股五郎との縁も是迄。思はぬ方便が縁に成、志津馬殿と云かはした、娘が身の果不便や」

したり黒星―う  
まく推測したり

そぎ尼一髪を短く切りたる尼

半蓋云々馬士  
眼八疊に此半蓋  
の中に入りたり

と、見れば籬の小影より、思ひ切髪墨染の、袈裟にかはりしそぎ尼姿。「お袖か。チ、出  
かしやつた。悪人の股五郎に、假にも女房と名の付た、其間違がそなたの不運。可愛や  
盛りの黒髪を」袖アコレ申、もう何にも申ませぬ。顔は見ね共云號の、男持のがうるさ  
さに、屋敷を戻つた其時から、尼に成氣で袈裟衣、今日一日に氣が替り、染違ふたる鐵  
漿付を、元の白齒と墨染に、染直しても脱しても、思ひ染た煩惱の、心が兀ぬ佛様、御  
赦されて」と身を背、泣ぬ氣を泣親心。幸、股五郎にも志津馬にも、縁を離れたお袖道心、  
袖振合ふも他生の縁、子に別れた順禮に、菩提の爲のよい道連、關役人の我娘、關所關  
所も切手入らず、中仙道への案内者、勝手に連て行れよ」と、娘に敵の道引を、遺子故  
に踏迷ふ、未來の契り鉦撞木、涙で渡す父母の、恵も深き觀世音、南無阿彌陀佛、南無  
阿彌陀、我子は冥途の道しるべ、志津馬唐木も恥合ふて、しほれぬ表、武士の禮、師弟は  
内證敵同士、幸、此儘歸るは比喩者、返せ」と一聲切付る。志「得たり」と請る半蓋に、馬士の  
胴切重切。幸「まつ其通りの手柄を待つ」致「まだお手の内は狂ひませぬ」幸「ハ、ハ、ハ、  
やがて吉左右々々」と、笑ふて祝ふ出立は、侍なりけり。三重

## 第九 伏見の段

夕日云々夕に  
いふ吳竹に暮を  
かく

志津馬一しやう  
にかく  
折しも一下に  
かく

撫一なくにかく

船頭「男共々々、ソレ胴の間へお蒲團は入たかな」「ハイ艦の間の四人様、水菜は爰に置  
まする」客「コレ船頭衆、此荷物破物じやぞ、ソレ氣を付て貰はふ」と、世話を素焼の土産  
物、積より早く押出して、舟を見送り、「御機嫌よふお下りなされ」と、そこへ、夕日  
程なく吳竹の、伏見の里の船著場、軒を並べし舟宿の、客に絶間もなかりけり。世の憂  
を、何と志津馬は此處彼處、敵の行衛尋ね兼、心氣勞れて眼病を、いたはる瀬川も諸共  
に、暫しは爰に宿して、北國屋が奥二階、手を引連てそろくと、梯子を折しも黄昏の、  
人なき隙を、幸と邊り見廻し、廻「イヤ申志津馬様、二階計もお氣詰り。月の夜すがの川  
景色見やしやんすのが日の養生」と、介抱如才撫さする、心遣ひぞわりなけれ。志「イヤ  
モウ何ほう養生仕ても、はかなくしうもない眼病。見かけに替りなけれ共、今日此比は  
此様に、そなたの顔さへわかり兼ね。ぶらく月日を過す中、主人上杉公急病にて、御  
死去遊されし由、御存生の中に、敵も討ぬ残念。頼に思ふ政右衛門殿、武介諸共引別れ、  
大坂へござつた故、此伏見に逗留するも、若や敵の。チ、是はしたり、思はず知らず大

萱にも云々木  
にも萱にも心置  
くと奥口とかく  
よございーよう  
ござるか

ないにこそ一な  
きにあらず

きな聲で。コレ誰も聞ては居なんだか」と、萱にも心奥口へ、聞へ憚り差寄て、ひそく、咄す店先へ、志津馬に連て孫八が、忍ぶ姿の按摩取、頭巾すつほり船著の、宿屋の門口から、孫按摩よござい」瀬「チ、孫八殿」孫「コレ」瀬川様、去とは物覺への悪い。我等按摩取の勘兵衛、必、龜相仰しやるな」と、云つと差寄小聲になり、「若旦那のお供仕て、二三日以前から、此伏見に逗留して、思ひ付た按摩疔癖、毎日々々此船宿、入込で氣を付れど、さして是とは申様な手がかりもござりませぬ。夫はそふと、若旦那少お目はよふござりますか」志「チ、孫八の心遣ひ忘れはせぬ。某とても此程より、歩行はならず、出入の旅人に、心を付て窺へ共、敵の行衛知ざる故、次第に重る眼病は、口おしさよ」と計にて打しほるれば、「お道理」と瀬川も涙孫八も、俱に目をすり居たりしが、孫ア、去込はお氣の弱い。何の神佛様がないにこそ。アレ天道が正直なれば、御孝行な心が届て、御本復も本望も、今の中でござりましょ。其様に思召すは養生の大きな毒。ヤ毒の次手に瀬川様、兎角病人は介抱が大事、お如才は有まいけれどお若い同士、何よりかより、お持合せの彼毒忌が肝心でござります、ハ、ハ、ハ、ハ、ヤ是から上手の宿屋を廻つて、後程お見舞申ませう」と、云つと立て表口、出るより早く聲張上、「按摩疔癖鍼

導引—按摩

我達—汝等

高木風に倒る—  
器量の有る人々  
ちれる噂

の療治」と、覗く隣の八百屋の店、奥の間よりのかくと、出るは櫻田林左衛門、「ア、旅勞れで殊の外頭痛がする。幸の導引、一つ頼もふかい」櫻「ハイ、左様ならお座敷へ」櫻「イヤ、表を見るも又氣ばらし。苦しいない爰で」櫻「成程それもよふござりましよ。ヤ旦那、御免なされませ」と、庭から直に店の間へ、上る孫八櫻田も、互に夫と面體を、知ねば何の氣も付かず、櫻「イヤコレ療治人、身は随分きついが好、遠慮なく揉でくりやれさ」櫻「ハイ、ア、きつう凝てござります。そふしてマア見受ました所がお歴々様、骨組と申丈夫なお産れ、嘸お力も強かるな。アノ兵法とやら劔術とやらも、定て抜てござるじや有な」櫻「フム我達が目にも左様見ゆるは尤々。天下下廣しといへ共、某に立合ん者は恐らく覺へない」櫻「成程左様に見へます。そふしてあなたのお國は何國で、何方へお出なされます」櫻「ム、身共は西國方の者成が、智謀劔術勝れし故、高木風に倒るる習ひと、傍輩の讒によつて、浪人して長々と漂泊せしが、サア身共程の達人がおらぬは、國の弱と有て、此度歸參を仰付られ、先知の上に過分の御加増、古郷へ歸る曠の道中、數多有供廻りは、別宿に扣へおれば、跡荷物揃ひ次第、明晝船にて下る積り」と、口から出次第僭上を、隣の店に漏聞志津馬、「アレ瀬川、あれを聞きや。同じ武士の身の上

長し〜なくにか

南蠻流一外國傳  
來の按摩術

めんない千鳥一  
目なしどり

でも、衰へると盛ふるは、是程にも違ふ物か。心を盡して尋扒す、敵には廻り逢ず、困窮の上此眼病。よつく武運に盡たか」と、悔むに瀬川も俱涙。「ほんに思へばおいとしゃ。沼津でお別れ申てより、お跡をしたい尋ね逢ふ、甲斐も長しい日は立ど、是ぞと思ふ手がかりも、ないを苦にして此様に、ほんに悲しい病目より、傍で見える目の私か心、推量して下さんせ」と、かこち歎くを此方には、聞耳立る櫻田が、兩耳びつしやり。豊ア、コリヤ何とする、放さぬかやい」豊ア、お前様も辛抱のない。斯致して引さけねば、お頭痛が直りませぬはい」豊ハテ仰山な按摩だな。シテコリヤ何といふ流ぢやぞい」豊是は南蠻流の隣の今宮流でござります」豊ハア聞へた、それで豊にするのじやな。ハ、ハ、ハ、ハ、」豊コレ瀬川、したが其様に案じてたもんな。此宿の亭主が引合せて、隣に逗留してござる眼醫者、竹中贅宅老の加減の藥、湯煎に立て洗てたも」瀬アイ」と云つよかい立て、勝手へ入て汲で出る、夫に盡す貞節の、心は清き清水焼、白湯に振出し差出せば、始終聞居る林左衛門、詞の五音心得ず、と延上つて差覗くを、ちやつと兩手でめんない千鳥、豊ア、コリヤ〜〜何とする、目が見へぬはいやい。又是も今宮流か」豊イエイエ〜斯致して置まして、ト一時に手を放すと、何とお目がはつきりと成てよござ





内證—ならにか  
居士衣—白の野  
服

覺束ながら押開く、襖の内より林左衛門、差足拔足表口、戸脇に隠れて立聞共、心付ねば、選テモ扱も政右衛門様のお氣の付た。私でも讀る様に假名交りの此手紙。ナニく、彌御無事と存じ候。然れば敵の落足とどめん爲、大坂川口の出口々々は、門弟共數多付置、油斷なく手當致し、我等事は武助諸共、尼崎兵庫の邊りに待受候間、其地にて替りし事も御座候はど、早速御知らせ下さるべく候。此由申入度早々以上「志」スリヤ政右衛門殿には、大坂を立て、兵庫の邊りへ參られしか。此方よりも委細の譯、返書に委しく申送らん。コレ瀬川、爰は端近奥の間で、太義ながら書てたも。飛脚の來ぬ中サア早ふ「アイ」と瀬川は夫の手を、引連這入後影、とつくと窺ひ、疊扱こそく、和田志津馬に相違なし。踏込で討放そふか。ハテ如何はせん」ととつ置つ、思案半へひよつかく、一僕さへも内證の、薄いを黒める木綿の居士衣、見るから藪井の竹中贅宅、療治仕廻ふて戻り足、夫と見るより、「チ、是はく隣座敷のお侍様、コリヤ端近にござりますな」棚「チ、昨晩ちよつと、御意得申た贅宅老。サ是へく」と片脇へ、招き寄て聲をひそめ、「今朝も申如く、隣家に逗留致して居る若侍がアノ眼病、貴殿が療治召るよに付折入て頼し密事、彌御承知下さるよや」贅「イヤモ御大身のあなた様のお頼、お禮物さへ

慥ならば」豊、先は過分。然らば打明お咄し申。子細有て某始め、別宿に逗留致す、組の者共へ仇有奴、と夜前より心を付るに、身共が推量少共違はず、彼が實名知たる上は、討て捨んと思へ共、彼者に力を添る劔術無双の曲者有故、我々が手にかくる時は、返て此身の有所も知、帯紐解て夜が寐られず。サア頼といふは爰の事、何卒貴公の働きにて、毒藥を藥と偽り、彼奴が眼の見へぬ様に、何と手段は有まいか。此事成就致しなば、一廉お禮を仕らふ。先頼の印」と、懷中より金子の包取出し、左少ながら」と手に渡せば、贅ヤアコリヤ金子五十兩。テモ結構なお印しやな。隣の病人治したとて、高々貳朱か、能ふくれて百疋は覺束ない。ほんの是が牛を馬に乗かへたと申物。後共云すたつた今、我等が祕方の毒藥を、差が相圖に兩眼より、五臟へ染込腐り藥、ちやくと用意致して置た。コレ刀入らずに仕廻うて取は、此贅宅が手の中に有」豊「エ、早速の得心、満足致いたく。必手ぬかりなき様に」「イヤモお氣遣ひなされますな、生す覺へはなけれ共、殺す事ならこつちが得物。委細はあれから御覽じませ」豊「いかにもよきに」と打點頭、謀し合して店の間の、障子引立窺ふ櫻田。何でもしめたと贅宅が、物に懸りの掴み頬、上べに見せぬ塗骨の、扇ばちく隣の店、「ヤ贅宅でござる。御見舞申」と、聲に志津馬

左少一些少

めんけん云々  
孟子に見えたる  
語、めんけんは  
誤也

は一間を出、「チ、是は御苦勞千萬。扱お歸りを待兼ました」贅「チ、そふでござらふ。晝  
からお見舞申筈が、御存じの流行醫者、あそこからも竹中爰からも贅宅様、生薬師じやと  
持囃して、漸只今罷歸つた。何と晝の洗ひ薬で、さつぱりとよからうがの」志「イヤさし  
て替つた事も」贅「ハテめんよふな、アノ薬でよい筈じやが。ドレ／＼今一度、見て進ぜ  
ふ」と、行燈引寄せ灯明りに、ためつすがめつすかし見て、「コリヤ内障立じやはいの。是  
なら洗薬では行ぬ筈。コリヤ取て置の點薬を出さずは成まい。コレ大切な薬じや程に、  
うつかりと思はしやんなや。氣遣ひ召るな、今の間に本復さして進ぜふ」と、こて／＼  
取出す薬箱。志「ア、是はよいお方に、かより合して拙者が仕合せ。此お禮は本望を、イ  
ヤ追付本復致したら、急度致すでござりましょ」贅「ハテ心遣ひさつしやるな。醫道は仁  
術、人を救ふは醫者の役ぢや。サアもそつと此方へ寄りつしやれ」と、片手に唾押明  
て、すくふ件の毒薬は、直に志津馬が命を斷。七の刃金の差薬。忽毒氣廻ると見へ、  
志「ア、きつふ此目が」贅「チ、痛む筈。しゆむか、しゆむで有がの。少しの間じや、こら  
へさつしやれ。薬めんけんせざる時は、其病治せずと申て、一旦動かねば薬は利かぬ。  
追付兩眼明らか、此生薬師が治して進ぜる。ドレ其間に一服致さふ」と、煙管取上す

素破の骨頂云々  
— 悪黨の親玉な  
れば落付いてゐ  
る

うつそり共—間  
抜共

つばく、素破の骨頂 納た頼付。志津馬は苦痛堪へがたく、「申々、是迄の御藥とは違ふて、五臓迄も染渡り、いかう苦しうござります」と、聲に瀬川も走り出、「若お藥は違ひはせぬか。お心慥に持しやんせ」と、一方ならぬ介抱に、じろりと眺め、鶯うつそり共め今樂じやといふて差たのは、我が目を潰さふ計。おれが祕方の毒藥じやはやい」志「ヤアヤアく、そんなら今のは毒で有たか。何意趣有て此仕業。サ様子が有ふ様子は」と、立上れ共よろくく、「瀬川何處に居やる、瀬川。爰が苦しいく、せつないわいの」と、夫の惱を見る悲しさ。有にもあられす緋り付、選「そんならお目が見へぬか。ハア。ヤイ胸欲醫者の鬼め魔玉め。ずたくくに刻でも恨ははれぬ」としがみ付、小腕取て膝に引敷、鶯「ヤアくくく、ばたくくと勿廻てももふ叶はぬ。イヤ申隣のお客、何と拙者の七加減を」鶯「チ、とくと是にて見届たり」と、物影より林左衛門、したり顔に歩み出、「和田行家が盼 同苗志津馬、無念に有ふな」志「ヤナニ 某を和田志津馬と知たこなたは」鶯「チヲ澤井股五郎に力を添る伯父の櫻田林左衛門、其方連が股五郎を討んなどは及ばぬ事」と、聞より扱はと這寄々々、志「敵の片われ遁さじ」と、刀の柄に手をかくるを、襟がみ攔んでぐひと捻付、鶯「ヤア 劔術無双の此櫻田に、刃向はんとは、小賢しい蚊貳蛤侍、捻

り殺すは安けれど、某始め股五郎が有家を知れては一大事と、贅宅に申合せし身が計略。眼も見へぬ分際でも、見事親の敵を討か 相手は大敵其上に、城五郎殿のお心付にて、刃術勝れし侍 數多付添ふ股五郎、所詮叶わぬ事だとあきらめ、首でも縊つてくたばれ」と、悪口雑言脚にかけ 踏付られて無念の齒ぎり。志エ、侍の有まじい比怯未練の此仕業。親の敵の股五郎に縁を引たる其方が、土足にかけられ、手向ひもならぬは、此目が見へぬから。エ口惜や無念や」と、拳を握り男泣。見るに瀬川が氣は狂亂、「目界も見へぬ志津馬様に、慘い辛い大悪人。天道様の明らかな、お目には是がかよらぬか。孫八殿は何してぞ。神も佛も恨めしや」と、聲を限りに泣叫ぶ。贅エ、やかましいわい、く。コリヤ眼の見へぬ計じやない 毒氣が五臟へ廻るが最期、追付ころり。百兩の褒美がほしさの仕事じやわいやい」 贅エ、贅宅が働きにて、此志津馬めを仕廻ふて取、待伏ひろく政右衛門め、鼻明すのが此方方便。荷物の内に忍ばせ置し股五郎にも落付せ、うぬらが苦痛を着にし、一獻汲ふ。ハレよい態」と踏飛し、駆け行端をしつかと取、志「すりや差敵の股五郎は」 贅エ、身共と一所に昨日より、是に逗留致し居るはい」 贅エエ 忝い 今こそ敵の在所が知た。志津馬様嘸御本望」と、ぬつと出たる池添孫八。主

欠入一駈入

從一度に身繕ふ。鹽ヤアくく、コリヤ儕眼が見へるな。贅宅こりやどふじややい」  
 贅「チ、日醫者と成て入込し、此贅宅が本名は、孫八が兄池添孫六。志津馬様と云合せ、  
 明らかな兩眼を自病と偽り、儕が俗性敵の行衛を知らん爲。首尾よふ參つた櫻田殿」と、  
 云れて恠り、鹽ヤ、スリヤ股五郎を見出さん爲、云合せて有たよな。此上は一味  
 の者へ告知せん」と駈け出る。「敵の加擔人逃さじ」と、拔手も見せず主従が、勵しき手  
 練の働きに、さしもの櫻田叶はじと、旅宿をさして逃込たり。「ヤアいづく迄も」と孫八  
 志津馬、駈入んとする奥の間より、「どつこいならぬ」と吳服屋十兵衛、かけ隔て支ゆる  
 を、血氣の志津馬が切先に、肩先すつぱり切下られ、うんと倒るゝ其隙に、奥を日かけ  
 て欠入を、「ヤレ暫く」と聲をかけ、濱邊に繋ぎし苦船より、船裝束を其儘に、武介引連  
 政右衛門、しづくと歩み出、「手に入た敵なれ共、爰では討れぬ子細有。町人ながら義  
 心有十兵衛が此深手。非道に組せし先非を悔、志津馬が手にかよりしは、本望ならん」  
 と有ければ、手負はむつくと起上り「チ、御推量の上は我所存、今更くどく申に及ば  
 ず。股五郎始め一味の者共、西國へ落失ては御本望の妨げと、政右衛門様の計略にて、  
 最前の似せ飛脚を、誠と心得裏道より、小倉堤を伊賀越に、志効鳥羽の港より、大廻し

わけて云々別  
てとりわけて  
とかけ此上な  
ら妹の事を頼む  
となり  
ぼつ付て―追つ  
きて

三ツ瀬川―三途  
の川、見るにか  
く

にて九刃相良へ、落失せんと云合せを、お知せ申て相果るが、志津馬様へのせめての寸志。町人なれ共敵の端くれ、股五郎に頼れた一つの命を兩方へ。わけて願ひは此上ながら「政ヲ、瀬川が事は政右衛門が、刀にかけて志津馬に添す」土ハ、武士の鑑の政右衛門様、其御一言は吳服屋が冥土の晴著。サア〜片時も早くほつ付て、此年月の御本望。早く〜と氣をいらつ、手負に取付く妹が、歎くを制して政右衛門、「ヲ、いかにもほつ付討留んは、我掌の中に有と、志津馬が亡君上杉殿の、御家門たる畠山、政家公よりすへ置れし、宇内公の石碑有伊賀路において本望達する物ならば、泉下にまします顯定公、行家殿への追善ならん。譬何百何十人、彼に力を添る共、天理に背敵の介太刀、何條恐るゝ事有じ。時は初更の戌の刻、先へ廻つて伊賀越に、多年の本望今此時」と、唐木が諫めに力足、手負を跡に三つ瀬川、三途の瀬ぶみは敵の魁、さらばさらばを夜嵐に、聲吹分る海道筋、跡を慕ふて三重急ぎ行。

## 第十 敵討の段

されば唐木政右衛門、股五郎を付出し、夜を日に繼で伏見を出、伊賀の上野と心ざし、

立附一袴の一種

先へ廻りて、代官所の届けも濟て、北谷の四つ辻に、主従四人我劣らじと入来る。政右衛門聲をかけ「孫八武介は我に構はず、志津馬をかこい。我兼て聞及ぶ、股五郎には付人ある、目ざす敵は只一人、譬助太刀何十人有逆も、何程の事あらん。最早来るに間も有まじ。身拵へを」と制すれば、志津馬は今日を一世の晴業、「心得たり」と片肌脱ければ、南蠻鎖の差込に、鎖り鉢巻、拜領の不動國行覺への名作。同唐木も立附に、澁の鉢巻信國の、ねた刃は兼て合詞いづれ劣らぬ古今の勇士。池添石留引添て、日頃の念願指す敵を、今や來ると待かけたり。程も有せず股五郎、悪黨原に前後をかこはせ、一番手は林左衛門、さどめき渡り我一と、小田町筋へと打通る。斯と見るより和田志津馬、木影より飛で出、向ふに立て大音上、馬ヤアくいかに澤井股五郎、汝が手にかけし和田行家が一子、同苗志津馬、此所にて待受たり。尋常に勝負せよ」と聲かくれば政右衛門、「ホ、久しや櫻田林左衛門、郡山にて真劍の勝負を望みし其方、今日に至つたり。サア覺悟せよ」と呼はつたり。「心得たり」と林左衛門、馬上より飛下るを、走りかよつて政右衛門、豁より肩先かけて切付たり。「ソレ遁すな」と聲々に、一流を得し附人共、志津馬を目當切かくる。「心得たり」と池添石留四人を相手に切結ぶ。股五郎志津馬は一騎打、兼て手



鐐せりーつばも  
とか

韋駄天一兩方の  
天王、八將の一  
にて能く疾走す

練の和田志津馬、爰に顯はれ彼所に切抜、飛鳥の如く早業に、股五郎もあしらい兼ね、突かける鎧先を、鐐せりに受留られ、跡退りに成てたぢくく、坂の下へと引て行、「こは心得ず」と團四郎、股五郎を救はんと、勢ひ込でかけ行所へ、「どつこいやらぬ」と政右衛門、仁王立につよ立たり。團「シヤ邪魔ひろぐな」と打かくる。政「心得たり」と受流し、付込所を身をひらき、飛よと見へしが團四郎、から竹割に切伏たり。返す刃に助太刀共、一人も残らずすくい切。志津馬が身の上氣遣はしと、二人の家來を跡になし、坂の下へと飛で行。孫八武介は死物狂ひ、數多の付人相人に取、切つ切れつ戦ひしが、數箇所の手疵に目をくらみ、同じ枕に死してけり。股五郎相人に和田志津馬、手利の晴勝負、いづれ抜目はなき所へ、政右衛門が韋駄天走り、「助太刀の奴原は一人も残らず討留しぞ。残るは其奴只一人。ソレ踏込で討留い」と、聲の介太刀百人力、よろめく所を付入て、肩先ざつふと切付たり。こは叶はじと股五郎、死物狂いと働け共、動せぬ武士の太刀風に、さしもの澤井も切立られ、しどろに成を疊かけ、突き一刀、大地へどつさり。起しも立す乗かより、志「年來の父の敵、舅の敵、主人の仇、一度に晴る胸の月」「空に知れし上杉の、家の譽れ」と悦ぶ唐木、武名は世々に鳴ひどく、和田が手疵も日を追

て、頓やがて全部ぜんぶ十冊物さつもの、此上もなき敵討かたきうち、今いまに譽ほまれを殘しける。